

令和6年度

幼稚園・幼保連携型認定こども園

中堅教諭等資質向上研修

課題研究レポート

令和7年3月

沖縄県立総合教育センター

令和6年度幼稚園・幼保連携型認定こども園中堅教諭等資質向上研修
 課題研究レポート テーマ一覧

	園名	氏名	テーマ
1	名護市立大北幼稚園	具志堅 飛鳥	主体的な遊びの中で学びを深める環境構成と援助の工夫 ～ 身近な環境に関わり遊びこむ体験を通して ～
2	伊江村立伊江幼稚園	棚原 まき	島の文化を子どもたちへ ～遊びや生活の中でイメージグチに親しむための工夫～
3	嘉手納町立屋良幼稚園	仲里 章乃	安心して園生活を送り互いに認め合うことができる環境構成の工夫や 援助方法について —遊びや話し合い活動を通して—
4	沖縄市立北美幼稚園	玉城 花恵	好奇心や探究心を育む環境構成や援助の工夫 —自然との関わりを通して—
5	宜野湾市立大謝名幼稚園	仲原 藍	自分の思いや考えを伝えあい一緒に活動する楽しさを味わう環境構成 の工夫 —日々の保育の振り返りをいかして—
6	宜野湾市立普天間幼稚園	安里 美和子	友達とのつながりを感じながら共に遊びや生活を創り出していく子の育成 —幼児の姿から思いを探り豊かな教師の援助や環境づくりを考える—
8	宮古島市立久松幼稚園	砂川 美樹	幼児が主体的に遊び込むための環境構成と援助の工夫 —幼児の可能性を引き出す保育を通して—
9	宮古島市立東幼稚園	根間 玲香	幼児教育と小学校教育との円滑な接続について —子どもの理解を深める教師の繋がり—
10	宮古島市立平一幼稚園	西田 千鶴	幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について —対話を通して言葉で表現する力の育成—
11	石垣市立あかし幼稚園	入与那国 絹江	好奇心や探究心をもって身近な自然に関わる子の育成 —保育ドキュメンテーションの作成を通して—
12	竹富町立うえはら幼稚園	光村 智香子	豊かな感情体験を通じた生きた知識や言葉の獲得を目指して —自然や素材とかかわる生活の中で—
13	うるま市立与那城こども園	森根 愛里	非認知能力を育てる保育実践 —集団遊びを通して—
15	浦添市立内間こども園	大城 さやか	豊かな感性や表現する力を育む幼児の育成 ～ 一人一人の幼児理解から見える視点を持った保育展開を通して ～
16	浦添市立牧港こども園	眞境名 葵	幼児の体の発達を促す援助の工夫 —幼児が自ら体を動かしたくなるような環境づくりを通して—
17	浦添市立学校法人みのり 学園幼保連携型認定 こども園みのり幼稚園	室伏 香奈	園生活に自発的に取り組むようになるための援助や環境の工夫 — 当番活動を通して —

18	那覇市立真嘉比こども園	古波津 いのり	幼児理解に基づいた保育の実践 — 遊びの発達段階の捉えを通して —
19	那覇市立天妃こども園	宮里 秀史	自分の思いを言葉で表現し互いの思いに気付いて一緒に楽しく遊びに 取り組める環境や援助の工夫 —保育教諭や友達との関わりを通して—
20	那覇市立大道みらいこども園	浦崎 祥代	一人一人が安心して過ごせる居心地の良い学級作りのための環境構成 と援助の工夫 —サークルタイムを用いて子どもと一緒に作る学級—
21	豊見城市立上田こども園	上間 綾音	幼児が安心して園生活を送る中で言葉を豊かにするための環境構成と 援助の工夫 —幼児理解と環境構成の工夫を通して—
22	豊見城市立上田こども園	与那覇 伊代	自分の思いを言葉で表現し伝わる喜びが味わえる保育の展開 —幼児理解と環境構成の工夫を通して—
23	糸満市立糸満南こども園	友利 亜紀	園児の興味や関心を捉え遊び込むための援助や環境構成の工夫 —振り返り環境の再構成を通して—

主体的な遊びの中で学びを深める環境構成と援助の工夫 ～身近な環境に関わり遊びこむ体験を通して～

名護市立大北幼稚園 教諭 具志堅 飛鳥

I テーマ設定の理由

近年、社会や生活の変化が加速度を増し、幼児を取り巻く環境も少子化、核家族化、情報化、人間関係の希薄化など、親以外の大人や他の幼児と関わる機会が減少してきている。また、感染症により、行動に制限があったため、幼児同士関わる場や豊かな経験をする機会が少なかったように感じる。

幼稚園教育要領解説の領域「環境」では、「周囲のさまざまな環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」と示され、さらに「幼児の主体的な活動と環境の構成」においては、「幼児が興味や関心をもち、思わず関わりたくなるようなものや人、事柄があり、さらに、興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、幼児の主体的な活動が生じる」と明記されている。このことから主体的な遊びの中で学びを深めるためには、環境構成と援助の工夫が重要だと考える。

本学級は、5歳児男子14名、女子16名、計30名である。今年度から3年保育がスタートしたが、本学年は、22か所の保育施設から入園した一年保育のクラスである。入園当初の様子は、気の合う友達を見つけて一緒に遊んでいる子もいるが、集団での遊びが苦手一人で遊んでいる子、初めて経験する遊びになかなか関わる事ができない子がいる等、人とのかかわり方や身近な環境に興味や関心をもって関わる事に消極的な子が多い様子が感じられた。また、これまでの私の保育を振り返ると、遊びが継続するような環境の構成が十分でなかったと考える。

そこで本研究では、身近な環境に関わり遊びこむ体験を通して、主体的な遊びの中で学びを深める環境構成と援助の工夫をしたいと考え、本テーマを設定した

II 課題に対する具体的な手立て

1. 主題について理解を深めるための理論研究をする。

(1) 環境構成や援助について捉える (幼稚園教育要領 第2章、第3節より)

① 状況をつくる

物的、人的、自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況を作り出す。

② 幼児の活動に沿って環境を構成する

幼児の活動の流れに即して、幼児が実現したいことを捉え、幼児の思いやイメージを生かしながら環境を構成していくことが大切。このように幼児自身が自ら学び、自ら考える力の基礎を育むことができ、主体性を育てることができる。

(2) 遊びの中の学びについて理解する (明日の保育が楽しくなる実践事例集 ワクワク! ドキドキ! が生まれる環境構成～3. 4. 5歳児の主体的対話的で深い学び～より)

子どもの姿の読み取り・評価→保育者の願い→保育の構想・計画→環境の構成→実践→子どもの姿の読み取り・評価を繰り返すことが子どもたちの経験している内容であり、遊びの中の学びである。

2. 主題テーマを意識し、日々の保育にあたる。

(1) 友達と関わりながら一緒に遊び、互いに楽しく活動できるようにする。

(2) 自分の思いや感じたことを素直に伝え合えるクラスの雰囲気づくりをする。

(3) 子どもの思いや願いを生かし、主体的・自発的な活動を構成する。

(4) 教師間で保育の振り返りを行い、ねらいに沿った環境を再構成する。

(5) ドキュメンテーションを作成し、クラスに掲示したり、保護者と共有したりする。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

「おばけやしきを作ろう」

☆読み取り ◎教師の願い ◆教師の援助、環境構成

【幼児の姿】

海洋博公園の段ボール迷路やライカムのお化け屋敷に行った経験のある子から始まったお化け屋敷。はじめは、教室のテーブル全部を並べて、順路を作ってもぐって楽しんでいましたが、給食になると食事のスペース確保のため、全部片付け、毎回給食時には、リセットなる状況。職員間で話し合い、給食の場所をホールへ移動。遊びが継続するよう、場を確保した。更に、2年生との交流会おもちゃランドへ行った経験から、作ったお化け屋敷を3、4歳児クラスの子を招待して楽しませたいという声が聞こえた。おばけやしきの場所を確保し、継続できる環境を作ったことで、自分たちで設計図を作り、役割分担をし、招待するためにどうしたらいいのか試行錯誤しながら、遊びを進めていく姿が見られる。

T児…「どんなお化け屋敷にする？」
 K児…「道作って迷路みたいにしよう」
 R児…「設計図作ろうよ」
 M児…「ダンボールで道作ったらいいんじゃない」
 T児…「スタートとゴール決めよう」
 I児…「お客さんが怖がるようにたくさん絵を描こう」
 T児…「高さを高くしたいね」
 R児…「ここ捕まえとくから倒れないようにテープで止めてね」
 K児…「ダンボールが倒れないように、牛乳パックをたくさんつめておもりをつけよう」
 S児…「ここに隠れてびっくり箱みたいにできてね」
 G児…「もっと暗くしたいな」
 R児…「お客さんにアイスもプレゼントしよう」



☆週末の楽しかった思い出を幼稚園でも再現したいのだろう。
 ◎継続して遊んで欲しいな。
 ◆継続して遊びができるよう、時間と場所を十分確保する。

☆場所と時間を確保したことで本格的なお化け屋敷が作りたいたいのだろう。
 ◎友達とアイデアを出し合い、相談したり、協力したりしながら作って欲しい。
 ◆マジックペンやガムテープ、セロハンテープ等必要な材料を十分用意する。
 ◆順路が作れるよう大きなダンボールを用意する。

2週間かけてやっと完成!

「病院やさんをつくろう」

入院した経験のある子から始まった病院ごっこ！自分が入院していたことを思い出しながら注射や体温計など入院生活を再現しながら作る姿が見られる。

T児…「注射、薬、包帯、ベットあったよ」
 K児…「お医者さんやりたい」
 T児…「入院しているときご飯もでてきたよ」
 一度自分たちで、近くにいる友だちを誘い、患者になってもらい、病院ごっこをして遊んでみる。
 T児…「ここで座って順番を待っててね」
 E児…「今日、どうしましたか？」
 S児…「足怪我しました」
 E児…「手当しましょうね」
 G児…「お腹が痛いです」
 T児…「入院です。注射しましょうね」
 E児…「薬も飲んで下さい」
 K児…「ご飯です。残さず食べたら退院できます」



☆入院した思い出から病院を再現したいのだろう。
 ◎入院して経験した知識を生かし、体験して楽しんで欲しい。
 ◆個室の入院スペースを作ることによって落ち着いて過ごせるようになって欲しい。
 ☆実際にあそんでみることでさらにイメージが広がり、遊びが広がるのだろう
 ◎ごっこ遊びをしていく中でさらにイメージを広げて欲しい。
 ◆病院はいつも清潔であることが大切だと感覚が持てるようにする。

「ごはんやさんをつくろう」

マクドナルドやレストラン等の飲食店で食事をした経験から始まったごはんやさん。始めは、別々のスペースでそれぞれ作って楽しんでいましたが、場所の確保等、話し合いの中で、一緒に行くことになり、メニューも増えてきている。さすが現代っ子！作ったのはタブレット？携帯電話？の注文票。また、お金を作る話は全く出ず…クレジットカードや携帯（QRコード）決済のイメージが強いようです。

R児…「ハンバーガーとポテト作ろう」

T児…「みそきん美味しいからメニューに入れよう」

E児…「ごはんやさん準備中です」

R児…「いらっしやいませー」

K児…「注文はこれでしてね」

T児…「メニューは何がありますか？」

R児…「看板必要だね。メニュー表作ろう」

E児…「支払いは、携帯かクレジットカードにしよう」

K児…「みそきんとポテト下さい」

R児…「はい。どうぞ。ありがとうございました」



☆家族での思い出を再現して遊びたいのだろう

◎飲食店で食事した経験を生かし、楽しんで欲しい。

◆作った食べ物の保存の仕方について話し合い、きれいにまとめると気持ちいいという感覚がもてるよう、片付ける場と一緒に工夫する。

☆実際にあそんでみることでさらにイメージが広がり、遊びが広がるのだろう

◆看板やメニュー表に必要な材料を用意する。

【幼児の変容】

- ・始めは、遊びに入れず転々としていた子も「仲間に入れて」と一緒になって遊び、「ピアノ係（効果音）したい」「お化けしたい」などそれぞれ役割も決め、イメージを出し合って作り上げる姿が見られた。
- ・振り返りの場を通して作り上げている過程を紹介することで、自分もやってみたいという子が増え、クラス全体の遊びへと広がった。

【考察】

- ・2年生との交流会「おもちゃランド」からの刺激をうけて、今遊んでいる遊びをさらに発展させて、たんぼぼ組（3歳児クラス）、ゆり組（4歳児クラス）を招待したいという目的が生まれ、工夫したり、協力したりするようになり、毎日コツコツと2週間かけて完成していった。また、この過程の中で、幼児は自分の思いを伝え合い、話し合い、新しいアイデアを生み出したり、自分の役割を考えて行動したりするなど、力を合わせて協力するようになったのだと考える。また、ドキュメンテーションを作成し、クラス便りとして伝える事で保護者とも共有することができた。

IV 実践の振り返り

- ・幼児の姿や興味、関心を捉え、「おばけやしき」や「びょういんやさん」、「ごはんやさん」をクラス全体の活動として計画的に環境構成したことで、協同した遊びにあまり興味や関心をもたなかった幼児もやってみたいという気持ちになり、遊びの環境に関わることができたと感じる。また、友達同士話し合う中でイメージを共有し、充実感や満足感を味わい、主体的に遊びこむ姿が見られるようになったのではないかと考える。

V 今後の実践に向けて

- ・ドキュメンテーションや保育記録を更に充実させ、個々に応じた援助を行い、幼児理解を深め、身近な環境に主体的に関わり遊びこめるよう日々保育を改善し、環境構成や援助の工夫を探っていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省 平成30年3月 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

公益社団法人全国幼児教育研究会 編著代表 岡上尚子 明日の保育が楽しくなる実践事例集 ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成～3. 4. 5歳児の主体的対話的で深い学び～ ひかりのくに

横浜市こども青少年局 横浜市教育委員会 ～横浜版 接続期カリキュラム～育ちと学びをつなぐ

島の文化を子どもたちへ ～遊びや生活の中でイーゾマグチに親しむための工夫～

伊江村立伊江幼稚園 主任教諭 棚原 まき

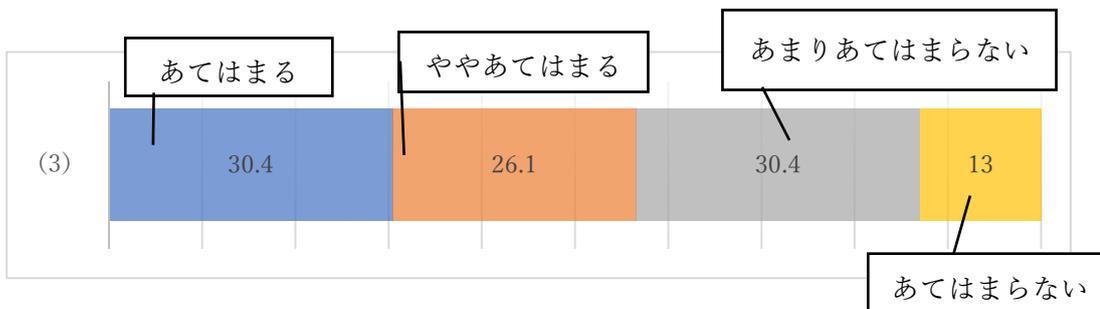
I テーマ設定の理由

本園は、4歳児16名、5歳児14名（2年保育）の計30名が在籍し、約半数の保護者が伊江島出身である。しかし、伊江島特有の方言「イーゾマグチ」を使うことや、聞いて理解できる人が大変少なくなっている。それは、保護者に限らず保育者にも当てはまる。ユネスコ（国連教育科学文化機関）では2009年にうちなーぐちを『消滅の危機にある言語』として認定している。伊江村民としての情操や意識が芽生えるように、伊江幼稚園では学習発表会等にイーゾマグチを取り入れ、郷土愛を育てていきたいと考える。前年度までに取り組んできた内容を今年度も継続し、研究テーマを「島の文化を子どもたちへ～遊びや生活のなかでイーゾマグチに親しむための工夫～」と設定した。方言に関する既存の資料等を利用した遊びと環境構成の工夫について保育を進め園全体の取り組みとして実践することで、幼児教育段階における文化の継承と保育の充実に繋げ、地域への愛着の醸成を図る。

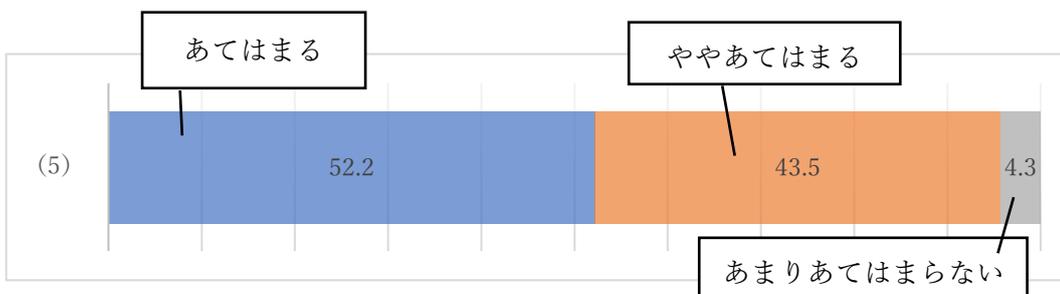
《家庭における子どもを取り巻く方言の実態》

子どもを取り巻く実態の実態を把握するため、6月にアンケート実施。30名中23人からの回答を参考にする。

(1) 同居家族にイーゾマグチを聞いて理解することができる人がいる。



(2) 子どもたちへのイーゾマグチの継承は必要だと感じる



II 課題解決に対する具体的な手立て

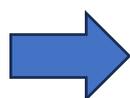
○ 日常の生活の中で朝の会や帰りの会、食事の準備の時間やはみがきの待ち時間など、クラスが集まるまでの少しの時間を利用し、クイズ形式にしたり、歌を歌ったりと楽しくスモールステップで取り組む。

○ 子どもが自分達で面白がって遊ぶような教材の工夫

III 課題解決に向けた取組（実践）

《1学期の方策》

- ① フラッシュカードの作成
- ② イーゾマグチ方言カルタの活用
- ③ 昨年度の「ちんぬくじゅうしい」へ憧れを抱き、「教えて欲しい」と踊って楽しむ



朝の会でお友達を待つ、給食配膳等の隙間時間を活用

【環境の工夫】



「ちんぬくじゅうしい」を主体的に習い、誕生会で披露。



右：玄関先や保育室のあちこちにイーザマグチカルタやフラッシュカードを掲示



左：トイレ イーザマグチカルタの絵札を掲示

【変容】

- ・イーザマグチに興味を示し、教師の発音を真似て楽しむ
- ・方言と絵が一致し、目にするとその単語を言うようになる（例：カラス、鳩、豆腐等）
- ・日常の会話から「後ろ前」等の方言を覚え、行動する

《2学期の方策》

- ① 方言を生活とつなげ、行事へ取り組む
- ② 友達とゲーム感覚で方言に親しむ環境の工夫

【環境の工夫】



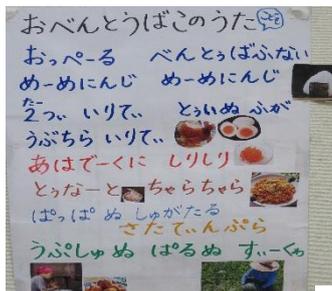
担任によるお月見会でのウー
トートを方言で行う



方言で動きを解説した運動会



動物ヨガの方言シナリオを貼りだす



お弁当箱の歌



自由にCDが聞けるコーナー



「いつで、どこで誰が」ゲームを楽しむ

【変容】

- ・身近にイーザマグチに触れる機会が多くなったことで知的好奇心が湧き、「もっと方言覚えたい」と子どもがつぶやく
- ・方言を知らない保護者へも伝えようとしている。
- ・「チューパンジャ(健康)祭り」で披露し、お年寄りの反応の良さに自信を持つ→もっとどこか(ミニデイ等)で「やりたい」の声が聞こえる。
- ・言葉の組み合わせを数人の集団で楽しむ姿がみられる。

IV 実践のふりかえり

(1) 成果

○歌や手遊びを繰り返し歌ったり聞いたり言ったりすることで言葉の響きを楽しみ、ニュアンスを感じとって真似て楽しむ。

○食べ物や体の動きを面白がりながらイージマグチで表現

例：1 給食では「豆腐^{とーぶ}や うぷすいぎ豆^{まみ}ら 作り^{しゆが}りん（豆腐は大豆から作られる）」等つぶやきながら食べる姿がみられる。

例：2 ^{いんぬーくわ}犬^わボーイ : 四つん這い

○祖父母等、年寄りの前でイージマグチを披露することで自己肯定感が高まった。→自信と郷土への愛着が形成されつつある。

○もっと覚えたい、しゃべりたいと言葉に対する知的好奇心が高まった。



絵本コーナーの一角にCDプレーヤーを設置。自分のタイミングで自由に楽しめる環境



興味のある子が集まって聞く様子。方言を真似して発音して楽しむ。

○方言での表現により、言葉に対するイメージが広がり、言い回しを楽しむ。（ゆっくり息をする→「ニグーニグ息^{いち}シュン」「ヨーニヤナ息^{いち}シュン」等）

○覚えた物語「カタンナーパ」を小学生に披露（読み聞かせ等）



幼稚園児に方言で読み聞かせする子がいる、と2年生が話を聞きに来た。（学習発表会では2年生が「カタンナーパ」を演じた）

(2) 課題

- 誰でも方言指導が維持できる環境づくり
- 小学校との継続した方言の指導
- 地域人材の活用
- 他園との制作教材の共有と活用方法の研修時間の確保

V 今後の実践に向けて

- ・3学期にアンケートを取り、イージマグチに取り組む前と後の保護者の気持ちの変化を知る。
- ・イージマグチにふれる継続した機会を教育計画に組み込む。
- ・保幼小中連携しての取り組みの提案。
- ・職員の負担にならないイージマグチへの取り組みを考える。

<主な参考文献>

- ・伊江島方言辞典（1999年） 監修：生塩睦子 発行：伊江村教育委員会
- ・イージマグチカルタ（CD付） 制作・発行：伊江村教育委員会
- ・伊江島の民話（紙芝居） 制作者 伊江村保育士年長担当者会

安心して園生活を送り、互いに認め合うことができる 環境構成の工夫や援助方法について

—遊びや話し合い活動を通して—

嘉手納町立屋良幼稚園 教諭 仲里 章乃

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領第二章、人間関係の中で「幼稚園生活において多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互い理解し合う体験や、考えを出し合ってより良いものになるよう工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる。」と記されている。このことから、幼児が安心して自己発揮できる場で、友達や教師と関わることで様々な思いに触れ、自分との思いの違いに気付いたり、折り合いをつけようと葛藤していく中で共感したり、互いに認め合おうとする気持ちが育つと考える。

本学級の実態として、5歳児（3年保育）男児17名、女児12名の計29名（進級児14名、新入園児15名）が在籍しており、明るく活発な性格の子が多く、友達同士誘い合っただけで体を動かすことや、虫探しなど興味のあることを楽しむ反面、友達との思いの違いからトラブルになるなど友達との関わり方に課題が見られる。

そこで、本研究では友達や教師との関わりの中で、一人ひとりが安心して園生活を送り互いに認め合うことができる環境の工夫や援助方法について考えていきたいと思い、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 一人ひとりが安心して自分の思いを伝えることができる学級作り

- (1) 教師が一人ひとりの幼児に思いを受け止め、喜びや悲しみに共感することで信頼関係を築いていく。
- (2) 安心して話すことのできる場の設定や、雰囲気づくりをしていく。

2 友達と思いを共有しながら遊びを進めていく楽しさを体験する

- (1) 友達と様々な心を動かす出来事を体験する中で、互いの感じ方や考え方の違いに触れる。
- (2) 思いを共有しながら遊ぶ楽しさを感じられるようにする。

III 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1 お祭りごっこをしよう！

【幼児の実態】

クラスでのひとときで自分の経験したことなどを話す中、休みの日に家族でお祭りに行ったことが話題に出ると、クラスで盛り上がり幼稚園でもお祭りごっこが始まった。

【教師の願い】

- ・お祭りごっこに向けて友達と一緒に活動する楽しさを味わってほしい。
- ・友達と関わっていく中で相手にも思いがあることに気づいてほしい。

【教師の援助・環境構成】

- ・お祭りごっこの品物作りに向けてどんな材料が必要なのか話し合い、自分たちで活動を進められるようにする。
- ・進捗状況を話し合う場を設け、友達のしていることや、困り感に気付けるようにする。

【活動の様子】



- ・「たこ焼きとか焼きそばあったよ。」「チョコバナナ食べた。」「ゲームもしたよ。」など自分が経験したことを話す。
- ・製作の中で「本物の焼きそばみたい」「どうやってたこ焼き作る？」など会話をしながら作っている様子が見られた。
- ・品物を飾る場面で「チョコバナナはカゴに入れよう」という子と「何かに立てて置くのはどう？」という意見に分かれる。実際に試したり、話し合いながら進めていく姿が見られた。
- ・お祭りごっこ本番では、3歳児、4歳児に「いらっしゃいませー」と呼び込みをしたり、ゲームを教えたりと優しく関わろうとする姿が見られた。お祭りが終わって後、3、4歳児から楽しかったという言葉聞き、誇らしげな様子だった。

【幼児の変容】

- ・クラス全体で話し合いながら活動を進めていったことで、製作の得意な子がリーダーとなり、アドバイスするなど自然と助け合う姿が見られた。
- ・意見が分かれる場面も見られたが、話し合うことで相手の思いに触れられる機会となった。
- ・自分たちのグループの製作が終わると違うグループの手助けをしようとするなど、普段の遊びでは関わりの少なかった友達との関わりも見られた。

実践事例2 ふわふわ言葉とちくちく言葉について考えてみよう

【幼児の実態】

- ・友達と一緒に生活する中で、口調が強くなる子、また言いたいことがあっても口にすることが難しい子など、互いに思いが伝わらずトラブルになることが多い。

【教師の願い】

- ・自分に思いがあるように、相手にも思いがあることに気づいてほしい。
- ・友達のいいところをたくさん見つけ、優しい気持ちで友達と関われるようになってほしい。

【教師の援助・環境構成】

- ・「ふわふわとちくちく」や「ええところ」などの自分が口にする言葉で相手がどんな気持ちになるかを考えられる内容の絵本を読み聞かせる。
- ・サークルタイムを設け、『ふわふわことば』と『ちくちくことば』についてクラス全員で考える。
- ・話し合いの中で出た『ふわふわことば』と『ちくちくことば』を書いて目に見えるようにする。
- ・『ふわふわことば』『ちくちくことば』コーナーを作り、相手の気持ちについて考える場となるようにする。

【幼児の姿】



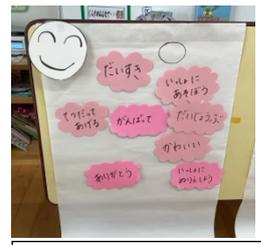
読み聞かせ



サークルタイム



意見を見える化



掲示していく

- ・話し合いが始まってすぐは自分がされて嫌だったことを話す子が多く、サークルタイムの中でも自分の思いばかりを主張する様子が見られた。
- ・遊びの中で友達に言われて嬉しかった言葉や、自分が友達に優しくしたことなどを話す姿も見られた。
- ・「ふわふわ言葉がいっぱいの幼稚園がいい」と言葉について考える姿が見られた。

【幼児の変容】

- ・自分が普段使っている言葉を意識しようとする姿が見られるようになってきた。
- ・幼児の目の届きやすい場所に『ふわふわ言葉・ちくちく言葉』のコーナーを設けたことで、自分が言われて嬉しかったことや、友達に言ったふわふわ言葉などを書き出す幼児の姿が見られた。
- ・普段の生活の中でも友達のいい所や優しさに気づき「〇〇してくれてありがとう。」など感謝の言葉が増えてきた。



ふわふわ・ちくちく言葉のコーナー

IV 実践の振り返り

1 成果

- ・お祭りごっこという一つの目的に向かって友達と協力しながら取り組む中で、友達の姿を認めたり、頼ったりしながら、みんなで作り上げていく達成感や充実感を味わうことにつながった。
- ・教師が幼児一人ひとりの声に耳を傾け、友達のいいところや得意なことをクラス全体へ知らせていくことで、幼児が友達の姿をより意識するようになってきた。また教師や友達に認められる喜びや受け入れられる安心感へとつながった。

2 課題

- ・思いを伝え合おうとする姿が育ってきた反面、友達とのトラブルでの話し合いが長くなり、折り合いがつかず納得しないまま話し合いを終えようとする幼児の姿が見られるようになってきた。
- ・自分の思いを伝えることが苦手な子へは思いを伝えることの大切さを知らせつつ一人ひとりに合わせた丁寧な対応を心がけていきたい。

V 今後の実践に向けて

- ・一人ひとりが安心して幼稚園での生活を送ることのできるように幼児理解に努め、環境構成と援助の工夫をしていく。
- ・友達と活動する楽しさを十分に味わうことができるよう、環境を整え時間を確保していく。
- ・思いを伝えることが苦手な子へは教師が仲介するなどして、無理なく思いを伝える経験ができるように援助していきたい。

〈主な参考文献〉

- ・文部科学省 平成30年『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- ・大豆生田啓友 豪田トモ 2022年『子どもが対話する保育「サークルタイム」のすすめ』 小学館

「好奇心や探求心を育む環境構成や援助の工夫」

～自然との関わりを通して～

沖縄市立北美幼稚園 教諭 玉城 花恵

I テーマ設定の理由

近年、インターネット環境の発達により、直接体験をしなくても知識として様々な情報が飛び込んでくる。しかし、幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方向的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自発的活動としての遊びを通して、人と関わる力や思考力、豊かな感性が育つとともに、生涯にわたる学習意欲や態度の基礎となる好奇心や探求心が培われていく。

幼稚園教育要領の幼稚園教育の基本では、「幼児の自発的活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。」と示され、「環境」の領域において、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが目的とされている。

本学級は5歳児（1年保育）計26名である。実態としては、ほとんどの子に集団経験があり、いろいろな環境や遊びに興味や関心を示し関わる様子が見られる。特に戸外遊びを好む子が多く、虫等の小さな生き物との関わりや砂場遊び、自然物を使った遊びなどを楽しんでいる姿が見られる。しかし、中には小さな生き物との関わりを促す環境を設置しても、あまり興味を示さない子や、気付いたことや不思議に思ったこと等を調べたり、友達と共有したりする楽しさを味わえていない子の姿も見られる。

このような実態から、教師のこれまでの保育を振り返ってみると、幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すための必要な援助や教育環境を整えることが、十分に行えていないことが私自身の課題であると感じた。

そこで、教師が幼児の発見を促す素材や空間を構成したり、興味や関心や試行を引き出す援助の工夫をすることにより、幼児は自己発揮し、自ら進んで環境に関わり、発見を楽しんだり、考えたり、取り入れたることで「やってみよう」「わかった!」「もっとやってみたい」等の好奇心や探求心をもつのではないかと考えた。そして、小さな生き物や自然と関わることで、そのような好奇心や探求心が育つのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 幼児の好奇心や探求心を育む教師の役割

(1) 幼児が自分なりに環境に関わる姿を大切にするとともに、場や物の配置を工夫したり、教師も一緒にやってみたりして、幼児が互いの考えに触れることができるような環境を構成する。

2 幼児一人一人の好奇心や探求心を育むための環境

(1) 子ども達が興味をもって主体的に関わることができる状況を意図的に整え、その活動や発見に寄り添いながら環境を柔軟に再構成していく。このような環境は幼児の内なる興味を引き出し、自ら考え、試し、学び深めることができる。

3 幼児期における自然の意義

(1) 自然との出会いを通して、幼児の心は安定し安らぐ。そして落ち着いた気持ちの中から、自然に繰り返し直接関わることによって、自然への不思議さや自然とかわる喜びの感情が沸き上がる。自然との出会いは豊かな感情や好奇心を育み、思考力や表現力の基礎を形成する重要な役割である。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

「秋の鳴く虫がやってきたよ」

幼児の姿

園庭では、トンボやキリギリスを追いかけて、捕まえたり、ジュズ玉などを集めて遊びに取り入れたりして楽しむ姿が見られる。また、秋の野菜や果物に触れたり、旬な食材を給食で食べたりして、季節の変化を感じている様子が見られる。また、ほとんどの子が、絵本や図鑑、童謡を通して、秋の虫がいることは分かっているが、鳴く虫を見たり、鳴き声を聞いたりしたことがないことが分かった。

教師の願い

- ・観察したり、鳴き声を聞いたり、触れたりすることで、鳴く虫に興味や関心をもってほしい。
- ・発見したことや分かったこと、感じたことなどを、友達や先生と共有する楽しさや嬉しさを味わってほしい。

援助の工夫① (環境構成等)

- ・幼児が自らコオロギを見たり、鳴き声を聞いたり、触れたりできるような観察コーナーを設置する。
- ・コオロギの観察をしたり、触れたりする時間を確保したり、気付いたことや感じたこと等を発表し、友達や先生と、共有する場を設ける。
- ・いろいろな秋の虫のペープサート等を準備し、遊びを通して鳴く虫への興味や関心が高まるようにする。

観察したり、触れたりできる環境



絵本やペープサートの活用

幼児の姿

- ・観察コーナーを設置するなり、興味を示し、観察を楽しんだり触れたりする姿が見られた。中には「こわい」「ゴキブリみたい」等と関わりを避ける子の姿も見られた。
- ・絵本や図鑑を活用しながら、友達と一緒にコオロギの家を作ったり、虫のペープサートを遊びに取り入れ、表現を楽しむ姿が見られた。
- ・園生活のいろいろなタイミングでコオロギの鳴き声が聞こえるようになり、気付いた子ども達から「鳴いている」「みんな静かにして～」「こんな鳴き声なんだね!?!」「かわいい声だね」等、興味や関心が高まっている姿が見られた。

援助の工夫②

○コオロギの観察を通して、鳴いていることに気付いた子ども達の姿を捉え、みんなで観察したり、触れたりする時間を確保したり、気付いたことや感じたこと等を友達や先生と受け止めたりする等、共有する場を設けることにした。



幼児の姿

- ・コオロギの観察をする中で、「夜に鳴く」ことが分かり、「部屋を暗くしてみよう」「コオロギにばれないように皆も眠ってまってみよう」「かくれて待ってみよう」「仲間を近づけてみよう」等、いろいろな方法を試し楽しむ様子があった。また、「何で泣くのだろう」という問いに「仲間を呼んでいるんじゃない」「オスが泣くんだよ」と自分達の知っていることや図鑑で調べたこと等、情報を共有する中で、興味や関心の高まりが感じられた。
- ・全体で観察したり、触れたりする機会を設けたことで、コオロギとの関わりに消極的であった子ども達も、他児に刺激され、触ることができるようになった。「かわいい」「もっと抱っこしたい」「私も触ってみたい」「手の中で動くからくすぐったいね」等、友達と楽しさや嬉しさを共有しながら、親しみをもったりする姿が見られた。また、近くで見たり触ったりすることで「触覚が長いのと短いのがいるよ」「しっぽが2本と3本がいるよ」等、発見したり、不思議に思ったりしたことを伝え合う姿が見られた。
- ・コオロギへの興味や関心が高まったことで、自ら関わりをもつ姿が見られ、「餌が無くなったら共食いしちゃうから餌あげないと。」「お家きれいにしてあげよう。」と友達と一緒に世話をしたり、命を大

IV 実践の振り返り

- ・教師が幼児の興味や関心を捉え、実物を見たり、触れたりする等の直接体験ができるよう、意図的・計画的に環境を構成することで「かわいい」「触れるようになった」「なぜ? どうして?」など、好奇心や探求心をふくらませるきっかけとなり、自分で調べて分かる喜びを味わったり、更なる好奇心や探求心が育まれたりしたのではないかと思う。
- ・幼児が身近な自然に触れる体験をしたことで、様々な感情や感覚を味わい、命ある生き物として捉え、親しみをもって関わったり、大切にしようとする気持ちが芽生えてきた。
- ・幼児の感じたことや疑問に思ったこと等を、友達や先生と互いに共有したり、様々な形で表現したりする場を設けたことで、幼児は秋の鳴く虫へ親しみをもって関わったり、進んで世話をしたりする等、いろいろな見方や考え方に深まりが見られるようになった。

V 今後の実践に向けて

- ・保育実践において、活動を通して学ばせたいことを意識していたが、教師の意図が強くなってしまふことがあった。幼児の心の動きや「何を学ぼうとしているのか」等、幼児を深く見取る力をつけたい。
- ・幼児が思考し、新たな発想につながっていく言葉かけや発問の工夫が不十分であった。今後、幼児の思考が深まり、遊びが展開できるような発問の仕方等を工夫していきたい。
- ・子どもの姿から興味や関心を捉え、環境を構成したり、さらに興味や関心を引き出すような問いかけや興味の発展を促す援助の工夫等を行いながら、幼児の「やってみたい」「もっと知りたい」という気持ちを引き出し、好奇心や探求心を育てていきたい。

〈主な参考文献〉

- ・文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル社
- ・文部科学省 2021 『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』 チャイルド社
- ・柴崎 正行 『保育内容 環境』 ミネルヴァ書房

自分の思いや考えを伝えあい一緒に活動する楽しさを味わう環境構成の工夫

—日々の保育の振り返りをいかして—

宜野湾市立大謝名幼稚園 教諭 仲原 藍

I テーマ設定の理由

本園の幼児の実態として、明るく活発で、自分の気持ちに素直な子が多い。リズムダンスや製作活動を楽しんでいる姿も見られ、日々の出来事を発表したい子など自分を表現することが好きな幼児や自分の考えや意見を言える子が多く、教師に自分の思いを素直に伝えるのが上手な子が多い。関りの中でトラブルが生じた際に自己の思いが優先され折り合いをつけたり、我慢をすることや気持ちを合わせたりするなどの調整する力が育っている子も多いが、一部で弱い子も見受けられる。

友だちと関わる中では、自分の思いを伝えるだけではなく、相手の思いを受け入れたり、受け入れられなかったりなどの葛藤を味わい、様々な感情体験を通して自分や相手の存在に気づき、お互いに気持ちを伝え合ったり、友達の良さを認め合う等、互いに認め合える場面を意図的に設けることで、幼児は友達の良さに気づき一緒に活動する楽しさを味わうことができると考える。

また、教師が幼児一人一人の興味・関心にあった、幼児の強みを引き出す、伸ばすことや認め共有することで幼児の自信へと繋がり、更に意欲的に園生活を過ごせると考える。

そこで、本園の幼児の実態を踏まえ、教師が日々の保育の振り返りを生かした環境構成の工夫を意図的・計画的に行うことで、幼児の心を揺さぶる環境に触れながら、幼児は遊びや生活の中で友だちと関わり互いに刺激し合い、感動を共有する中で、自分の思いや考えを伝えあうことができるようになるのではないかと考え本テーマを設定した。

II 研究内容

○自分の思いや考えを伝えあう活動とは

教育要領によると言葉による伝えあいとは、領域「言葉」などで示されているように、身近な親しい人との関りや、絵本や物語に親しむ中で、様々な言葉や表現を身に付け、自分が経験したことや考えたことなどを言葉で表現し、相手の話に興味を持って聞くことなどを通して、育まれていく。

幼児が言葉を獲得していくにつれて芽生える、幼児の話したい、表現したい、伝えたいなどの様々な気持ちを受け止め、生活の中で必要な言葉を使う場面を意図的に作り、言語活動を充実することで、幼児は親しい人に言葉で伝えたいとなる。

・教師の援助の援助

幼児は相手に自分の思いが伝わり、その思いが共感できることで喜びを感じたり、自分の言ったことが相手に通じず、言葉で伝えることの難しさやもどかしさを経験したりする。また相手に自分の思いを伝えるだけではなく、教師や友達の話聞く中で、その思いに共感したり、自分のこととして受け止めたりしながら、熱心に聞くようにもなっていく。教師が心を傾けて幼児の話やその背後にある思いを聞き取り、自由に話せる環境を構成したり、幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりすることで、幼児の伝えたいという思いや相手の話を理解したいという気持ちを育てることが大切である。

○言葉を表現したくなる過程とは

幼児が様々な体験を言葉で表現できるようになっていくためには、幼児が安心して話をするのできる雰囲気や気軽に言葉をかかわることができる教師や友達との信頼関係のもと、自分なりの表現が様々な人へと伝わったときの嬉しさや喜びと、相手の話を聞いて分かる喜びを通して、もっと話したいと思えるようになる。自分の気づきや考えから新たなやり取りが生まれ、活動が共有されていく満足感を味わうことで、幼児の言葉で表現しようとする意欲は高まり、相手に分かるように言葉で伝えようとしていく。

3歳頃：思いや気づきを人に話そうとする

- ・思ったことや気づいたことをはなすようになるが、まだ気持ちは伝えられないこともある。
- ・絵本の物語に入り込んで、主人公と一体化する。
- ・興味が広がり「何で」「どうして」といった質問が増えてくる。

4歳頃：気持ちや考えを言葉で伝えようとする

- ・気持ちや考えたことを言葉にして伝えようとしたり、友達とイメージを共有して楽しんだりするようになる。

5歳頃：相手にわかるように伝えたりはなしあったりできるように

- ・イメージの共有のために、状況に応じて自分の思いや考えを話したり、相手の話の内容を注意して聞いたりするようになる。
- ・相手の意見を受け入れながら、話し合えるようになる。

・絵本や物語に親しみ、思考力や工夫する力を働かせるようになる。

○幼児の心を揺さぶる環境構成の工夫

心を動かされる体験には、自然の美しさや不思議さに触れたとき、楽しい活動に参加した時、面白い物語を聞いた時などの感動的な体験ばかりではなく、友だちともめたり、失敗したときに、悔しい思いをしたりするなどの感情的な体験もある。

環境を構成するということは、物的、人的、自然的、社会的など様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が興味や関心を抱き主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況を作り出すことである。

・教師の援助

教師は、一人一人の幼児が今何に関心を持っており、何を実現しようとしているのか、幼児の内面の動きや活動への取り組み方、その取り組みの中で育ちつつあるものを理解することが大切である。一人一人の幼児の中に今何を育みたいのか、一人一人の幼児がどのような体験を必要としているのかを明確にし、幼児が活動の中でどのような体験をしているのかを考慮しながら教師としての願いを環境の中に盛り込んでいかないといけない。

・環境構成と環境の再構成

幼児の興味や関心を大切にしながら、活動の充実に向けて幼児とともに環境を構成し、再構成し続けていくことが大切である。

・さまざまな興味・関心を引き出す環境 (学びを支える保育環境づくり) 高山静子 著

心理学者のガードナーは、人間の能力には多様性があり、それぞれの人が強みがあると説明している。保育室と園庭には、多様な興味・関心を引出し、それぞれの子どもの良さに気づき強みを伸ばせる環境を構成する必要がある。

Ⅲ 実践事例

実践事例 “生活発表会に向けての取り組み”

《幼児の姿》

生活発表会に向けて、年長児は今までの経験から自分のやりたいことを考えたり、素材を使って自分なりのイメージを形にしようとする姿や、友達同士で相談しながら進めていく姿、挑戦してできるようになったことを披露したいと張り切る姿や、みんなに見てほしいという声が聞こえてきた。

年中児は集団生活が初めての子が多く、生活発表会がどのような行事なのかを理解していない子も多く、楽しみにしている子もいれば不安を感じている子もいる。

《教師の思い・気づき》

《教師の援助・環境構成》

- ・子ども達と話し合いをしながら一緒に作り上げていく発表会にしたい。
- ・子ども達の不安を減らし、子ども達のイメージを大切に受け止めながら形にできるようにしていきたい。
- ・年長児は意欲的な子どもが多く、自分のイメージやアイデアを表現することが得意な子が多い。



- ・前年度の発表会の様子をDVDで見たり、表示の作成、子どもの興味や関心が持てるようなコーナーを作成し衣装や小道具を準備したり環境の構成を行った。



*去年の発表会の様子



*運動遊びのチーム

《幼児の変容》

コーナーを準備したことで、衣装を使ってごっこ遊びを楽しんだり、舞台上リズムダンスや、パーランクーを持って踊るなど、思い思いに表現する姿が見られた。又、表示を見ながらイメージを膨らませ自分はどんなことをやろうか考えたり、新たな目標に向かって取り組もうとする姿が見られた。

自分のアイデアを形にしようと必要な素材を使って試したり、工夫しながら形にしていって姿や友達と一緒に、イメージを共有する姿が見られた。



*素材を使って衣装づくり

《幼児の姿》

発表したいことがだんだん決まってきた発表会に向けて教師や友達同士で相談ができるようになり、自分のやりたい種目に必要な準備を教師や子ども同士で進めていくことする姿が見られ、発表会に必要な道具の準備やプログラム作りなど、アイデアを出し合いながら、積極的に取り組む姿が見られてきた。



*自分たちでプログラムを考えている様子



*カーペットの準備



*発表会の壁面づくり(タイトル)

カーペットを準備しよう！
ゆっくり転がすんだよ！

プログラム何番までにしよ
うかな？園長先生からプレ
ゼントも欲しいな！

《教師の思い・気づき》

- ・子どもの表現や発想を受け止め、自分の思いや考えを友達同士で伝えあいイメージを共有して楽しめるように関わっていききたい。
- ・互いのアイデアが受け入れられ、みんなで発表会を作り上げていく面白さを感じ、自信を持って表現できるようにする。
- ・意見が折り合わないときも、相手の考えを聞いたり新たなアイデアを出したり自分たちで解決していこうとする姿を認めていく。

《教師の援助・環境構成》

- ・子ども達のイメージを聞きながら、どんな発表会にしていきたいのか話し合う時間と場を設け、思いが共有できるようにする。
- ・子ども達の考えたことをみんなが共通理解できるようにドキュメンテーションを作成し表示する。
- ・したいことを実現できるように、相談しながら必要な素材や材料を準備する。
- ・友達同士の関りを見守り、必要に応じて仲立ちをする。



《幼児の変容》

生活発表会に向けての取り組みの中で、徐々に自分たちのイメージを教師に伝えてくるようになってきた。自分の思いや考えを友達に伝えようとする姿も見られ、話し合いをする場では、互いにアイデアを出し話し合いながら、受け入れられる喜びを感じたり、友達と一緒に活動を楽しむ姿が見られた。折り合いがつかずにトラブルになることもあったが、友達の意見を受け入れる姿や友達の良さを認め発表会に向けて一緒に進めていく姿が見られた。

IV 実践の振り返り

《成果》 子どもの思いを丁寧に受け止めながら、教職員同士で日々の保育反省を行い、日々、子どもの実態に合わせた環境構成をすることで、子ども達自ら、試したり工夫したり、やってみよう、挑戦してみようという姿が見られるようになってきた。子ども同士、自分の思いや考えを伝えあうためには、十分な時間や場の確保、信頼関係のもと、友達同士で思いを伝えあい発表会に向けてみんなで取り組んでいくことができたと感じる。

《課題》 自分の思いや考えをうまく伝えきれぬ子もいれば、なかなか自分の思いを伝えることができない子もいたので、伝えきれない子へはいろいろな方法で表現できるように援助していけたらよかった。保育時間内で、子ども達の思いを受け入れたり、形にするのに十分な時間の確保等が難しかったので、保育の中での時間配分を考えていきたい。また、日々の保育の振り返りも、職員全員では時間の確保が難しかった。時間を工夫して話し合いの場を設けていきたい。

V 今後の実践に向けて

子ども同士で自分の思いや考えを伝えあい一緒に活動していく中で、受け入れられたり、受け入れてもらえずに葛藤する様子も見られたが、どの子も、話し合いを通してお互いの良さに気づき、認め合う中で、一緒に活動していく楽しさを味わうことができたと考えられる。これからの幼稚園生活でも、互いに思いや考えを伝えあい、みんなで幼稚園生活を作っていけるように援助していきたい。

《主な参考文献》

学びを支える保育環境づくり 高山静子 著
子どもが中心の「共主体」の保育へ 大豆生田啓友 監修 おおえだけいこ 著
ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成 公益社団法人全国幼児教育研究協会 編集代表 岡上直子
幼稚園教育要領解説 文部科学省

友達とのつながりを感じながら、共に遊びや生活を創り出していく子の育成 — 幼児の姿から思いを探り、豊かな教師の援助や環境づくりを考える —

宜野湾市立普天間幼稚園 教諭 氏名 安里 美和子

I テーマ設定の理由

近年、情報化やグローバル化という社会的変化の加速を受け、人々の価値観や生活様式も多様化している。それは子供達の生活にも多大に影響を及ぼすものとなっている。子供同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って、活動する機会が減少する一方で、テレビゲームやインターネット等の受け身の室内遊びが目立ち、日常的に様々な体験の機会が減少している。受け身の遊びは、相手の表情を見たり気持ちを想像したりし、考えたり言葉を発信する、いわゆる、互いに影響し合う直接的な遊びとは異なるものであり、人間関係の希薄化や言葉・表現力・思考力の欠如が懸念される。

幼稚園教育要領解説第1章「幼稚園教育の基本」の中で「友達との関わりの中で、幼児は相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらに関わる意欲を高めていく」とある。このため、幼稚園では幼児が家庭での成長を受け、集団活動を通して、家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れ、保育者に支えられながら、幼児期なりの豊かさに出会う場であることを踏まえ、幼児が友達と十分に関わって展開する生活を大切にすることが重要である。

本学級は、4歳児（2年保育）男児3名、女児8名、計11名が在籍しており、学級の実態としては、ほとんどの子が集団を経験していて、友達と一緒に製作遊びや虫捕り等、自分の好きな遊びを見つけて友達を誘って一緒に遊びを楽しむ子の姿が多く見られる一方で、友達と遊ぶことよりは教師の傍で過ごすことを好んでいる子もいる。また、友達が教師に褒められると自分も褒められたい気持ちが強く、怒り出したり、友達に対して自分が優位であるような言葉を発する子など、遊びや生活で経験の差があり、一人一人の実態に応じた保育が必要だと感じている。

このような姿を丁寧に受け止め、教育目標である心豊かな子、よく考える子、意欲的な子の育成に向かい、これから繰り広げられる生活や遊びの様子から幼児の心の動きを多面的に捉え、日々の保育の振り返りやエピソード記述等を活用しながら教師間で共有し、理解を深めていきたい。また、併せて人的環境としての教師の援助や環境の構成を工夫し、ここでしか味わえない体験を重ねることで、友達とのつながりを感じながら共に遊びを展開していけるような幼児を育て、教師も共に充実した生活を創っていくことを目指したいと考える。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 幼児一人一人の発達の特徴（その幼児らしい見方、考え方、感じ方、関わり方など）理解し、その特徴やその幼児の発達の課題に応じた援助を行う。
- ② 発達の時期を踏まえ、人と関わることの楽しさを味わえるよう、遊びや環境の構成を工夫する。
- ③ 教師が友達とのつながりを意識したクラス活動を行う。

III 課題解決に向けた取組 （実践）

◆実践事例1：「友達と一緒にだと楽しいね」

【幼児の実態】

新しい環境に慣れるには時間を必要とするA子。初めて取り組むことに緊張してその場を離れてしまう。登園時、保護者と離れると泣き出してしまいが、自分で気持ちを整え好きな遊びを楽しんでいる。入園当初から年長児や教師と過ごすことを好み、一緒に追いかけてっこをしたり、自分の気持ちを伝えながら楽しむ姿が多く見られたが、クラスで過ごす時は周りの友達が会話を楽しみながらままごと遊びをする傍で、一人、黙々とパズルや粘土遊びをしている。教師がままごとあそびに誘うもA子は興味を示さなかった。クラスの友達と一緒に過ごす時は、平行遊びのように友達との関わりは少ないが、A子なりに安心感をも

って過ごしている。同年代の友達との活動では本児が本来の力を発揮することができない様子が多く見られた。

【教師の願い】

- ・年長児と遊ぶ時と同様にクラスの友達とつながりを感じながら一緒に遊ぶ楽しさ、面白さを味わってほしい。
- ・A子から積極的にクラスの友達と関わり、自分の思いや考えを伝え合いながら遊びを進めてほしい。

【教師の援助と環境の構成】

- A子は数名の集団で遊びを進めていくことより、個別でじっくりと遊ぶことができるようにA子とクラスの友達を一人だけ誘い、二人で過ごせるように場の設定をした。
- クラス活動では主に触れ合い遊びを取り入れ、友達と遊ぶことの楽しさを感じられるようにした。
- A子が得意とする梯子登りをクラスみんなに披露し、周りの友達から1番高い所まで登れるA子が称賛され、A子の自信となるように援助を行った。



【幼児の変容】

- ・友達に対して「A子も一緒に遊ぼう」と誘う場面が見られたり、A子の遊びに友達が入って来ると快く受け入れ一緒に楽しむ。
- ・一人でじっくりと遊ぶこともあるが、自分がやりたい遊びを終えると友達の輪の中に入って遊ぶ姿も多く見られるようになった。
- ・ブランコや梯子に乗って楽しむA子。友達が順番を待っていたら、「交代しようね」と声を掛けながら譲ったり、友達に乗り方を教えたり、梯子が揺れないように支える姿がある。



【考察】

- ・集団で遊ぶことが苦手と感じるA子に少人数で遊べる環境をつくることで、安心して友達と関わることができ、自分の思いや考えを伝えながら遊びを進めていくことができたのではないかと考える。
- ・園生活を通して「自分でできた」と感じる場面を多く取り入れてきたことで本児の自信となり、友達と誘い合って遊ぶ楽しさを感じるようになったと考える。

◆実践事例2：「たんぼぼ組の花さき山をつくろう」

【幼児の実態】

2学期後半になり友達にも慣れ親しみを持つことができる反面、友達に対して強い口調で言ったり、友達が使ったハサミやクレヨンを見つけると教師に「これ貰ってもいいよ」と言って、友達が困っても平気な姿が見られるようになった。また、友達に対して自分が優位であるような発言をしたり、自分より相手が優位だと感じると「いんちき」と発して相手を困らせたりとまだまだ自己中心的であり、相手の気持ちを考えることができない子の姿もある。

【教師の願い】

- ・友達の良いところを見つけ、優しい気持ちで友達と関わるようになってほしい。
- ・友達の良さを知り、互いに認め合いながら園生活を過ごしてほしい。

【教師の援助と環境の構成】

- 11月頃から取り組んでいる手遊びや絵本を通して「たんぼぼ組の花さき山」をつくるクラス活動を行った。絵本の世界を自分なりに感じることができるよう絵本を読み、幼児が分かりやすい言葉を添えながら物語がイメージしやすいように伝えた。
- 絵本を読み終えて、物語の内容をクイズ形式にすることで園児に物語の内容が伝わっているかを把握することができ、そこから自分自身や園生活に置き換えて、考えることができるようにした。

絵本を読み終えて～作った山を園児に披露した。

教師：これ、なんだと思う？

幼児：山だよ。あそこは道だよ。

教師：山があるけど、花が咲いていないね。どうしたら花が咲くのかな？

R子：優しいことしたら花が咲く

教師：そうだね！みんながお友達から優しくされたこと嬉しかったことあるかな？

E子：R子にブランコを譲ってもらってうれしかった。譲ってもらって、心に花がさいた。

教師：嬉しいね。花が咲いたね。

山に花を咲かせると

R子：もうちょっと咲かせたほうがいいよ。

H子：H子もブランコを譲ってもらったよ。

R男：K男に虫網を貸してあげたよ。

Y子：新しく来たS子にほうきがある場所を教えたよ。

優しくされたことや嬉しかったこと以外に、竹馬やホッピング等の運動遊びに挑戦しできるようになるまで頑張るR子の様子を紹介し、友達のいい所を見つけられるようにした。

『たんぽぽぐみのはなさきやま』と名前をつけ、いつでも花を咲かせることができるように、クラスのみんなが見やすい場所へ掲示することにした。

後日、友達がブランコを譲る姿をR子が見ていて「今、花さき山が咲いたね」と周りの子や教師に伝え、友達の良さを共有する場面があった。



H子も花さき山に
花を咲かせよう！

【考察】

- ・友達の良いところを感じることができるよう手遊びや視覚教材を活用し、クラス全体で共有したことで、絵本の内容も受け入れやすく、友達との関わりを振り返ったり考えるきっかけとなったと考える。
- ・友達の良さに気づいたり、自分自身も相手に対して優しくしようとする姿が見られたり、「お友達に優しくしたよ」と言葉で伝える嬉しさを感じている姿がある。

IV 実践の振り返り

1 成果

- ・個々の発達に寄り添った援助を工夫したり、教師も一緒に活動をし安心感を持つことで、自ら友達に関わろうとすることができるようになった。
- ・日頃、楽しんでいる手遊びと絵本を用いて友達のいいところを見つける活動を取り入れたことで、相手の思いを知ったり、こうしたら友達は嬉しいかな、喜ぶかなという気持ちが芽生えてきた。

2 課題

- ・一人でじっくり遊んでいる場では本児なりに楽しんでいることを捉え、援助のタイミングや仕方を工夫する必要がある。
- ・クラス活動の場で自分の思いを出せない子もいたので、友達の良いところを感じられることができるように個々に思いを引き出せるようにし、クラス活動を継続的に進めるようにする。

V 今後の実践に向けて

- ・今後も幼児が友達とのつながりを感じながら、豊かな体験を積み重ねることができるよう環境の構成や援助に努め、保育の質の向上を図りたい。

〈主な参考文献〉

内閣府 文部科学省 厚生労働省 2022 『幼保連携型認定こども園における 園児が心を寄せる環境の構成』

フレーベル館

文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

森上史郎 小林紀子 渡辺英則 編 2009 『保育内容「人間関係」』 ミネルヴァ書房

幼児が主体的に遊び込むための環境構成と援助の工夫

—幼児の可能性を引き出す保育を通して—

宮古島市立久松幼稚園 教諭 氏名 砂川 美樹

I テーマ設定の理由

近年の核家族化、少子化、デジタル化、グローバル化などの社会の変化により、幼児の家庭や地域での生活や遊びは大きく変化している。これからの幼児教育は、幼児自らが積極的に多くの人と関わり家庭では体験できない文化、自然などに触れ幼児の心を揺り動かすような豊かな体験をすることを通して生きる力の基礎を育む発達を促すことの重要性が求められる。

幼稚園教育要領解説には、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより、発達に必要な体験を得ていく物であることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい活動が展開されるようにすること」としており、そのために教師は「主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の活動の場面に応じて様々な役割をはたしその活動を豊かにしなければならぬ」と明記されている。

本園の子ども達は活発で、戸外では固定遊具や虫取り。室内では折り紙、大型積み木、廃材での製作遊びなど、自ら好きな遊びを見つけて遊ぶ姿があるが、遊びが見つけれず転々とする子、きっかけがないと遊べない、目的が持ちにくい、遊びが継続しにくいといった姿も見られる。また教師は遊びをどのように捉え、どこまで、どのように遊びに関わればよいのか、環境構成は適切であったかなど、幼児一人一人の発達の過程に応じた環境構成と援助の工夫が課題であると感じている。

そこで、子ども達が主体的に遊びを見つけ、遊び込めるようにするために、日々の保育を振り返り適切な環境構成と援助の工夫をしていきたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 幼児理解を深めていく

生活の中で、幼児が今何に興味や関心を持って、どのように広げたり深めたりしているのか、遊びの傾向はどうかどのような生活への取組をしているのか等、幼児の姿や変化を丁寧に見ていく。

2 週案、記録、ドキュメンテーション等からの保育の振り返りを行う

幼児の生活する姿から記録をとり、ドキュメンテーションを作成する。それを基に保育や遊びを振り返り次週の週案につなげていく。

3 幼児が遊び込むための環境構成の工夫をはかる

幼児が自ら主体的、意欲的に色々な物に、挑んでいく環境構成を図る。

子どもに任せてどうすればいいのかを考え、自ら決めていく経験を積み重ねる。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

実践事例1【水族館&お店屋さん】

<p>○幼児の姿〈スイミーを作るぞ〉</p>	<p>☆教師の援助や環境構成 ◎教師の願い</p>
<p>7月スイミーの絵本読み聞かせから、魚作りが始まり、作った魚を壁面や窓に貼っていく。 「もっとつくりたい」との思いから、図鑑を開いて色々な魚を見ながら魚を作っていく。</p> 	<p>☆夏の暑い時期スイミーの絵本の読み聞かせを行う。作った魚を壁面や窓に貼って夏の涼しさを感じるようにする。 ◎色々な魚がいるのに興味を持ってほしいな。 ☆形や大きさを見ながら「なんて魚?どんな魚がいるのかな、宮古島でみられる魚は?」と聞いてみる。</p>

〈トンネルすいぞくかんをしたい〉

<p>窓に貼った魚たちを見て「トンネルみたいな水族館が作りたい」と言い段ボールを組み立てていくが、段ボールだけでは、潰れてきてうまくトンネルのようにならない。 サッカーゴールを支柱にし、上に段ボールを乗せて自分たちの背丈の高さになり、満足して水色の画用紙や魚達を貼り付けていく。</p>	<p>◎水族館という共通の目的を意識しながら、友達と協力して遊んでほしいな。 ☆「何か支えが必要だね」側にあったサッカーゴールを使って見たらと声をかける ☆必要な物を一緒に考えながら友達と考えを出し合い作る姿を見守り、援助をする。</p>
---	---

〈みんな一緒がいいね〉

<p>一方で畑から野菜を収穫してきた子ども達が「この野菜どうしようかな」「お店で売ろう」とダンボールでお店のカウンターを作り野菜を並べる。水族館も気になる子ども達は「いいこと考えた」「美ら海にはおみせもあるよね」と水族館の出口にお店を設置し〈みやこすいぞくかん〉ができあがった。</p> 	<p>☆子ども達がいつでもイメージした遊びが展開できるように段ボールや色々な素材の用具を準備し選べて使えるようにする。 ☆子ども達の声や発想を大事にし実現できるように一緒に考え援助する。</p> 
---	--

〈みせたいな〜〉

<p>水族館ができあがると、園長先生や他のお友達にも入ってもらいたいとの思いから、「水族館にはチケットが必要だね」とチケットを作り入場ゲートも設置し水族館ごっこを楽しんだ。 水族館ごっこを楽しんだ後は、7月後半のなると水色の画用紙を黒に換え今度はお化け屋敷作りが始まった。</p>	<p>☆継続的に遊び込めるように時間や空間の確保としてホールを製作作業コーナーにする。</p>
--	---

《実践事例1の考察》

・絵本の読み聞かせから、子ども達の声聞き興味や関心を持たせ、イメージに合うように材料や道具等の援助をしたことで、遊びが深まり意欲的に遊び込む姿が見られた。

実践事例2【忍者の修業】

〈子どもの姿〉10月

- ・縄跳びや、フラフープ等の運動遊びは普段から取り組む子が多い。一方で、運動遊びに関心が薄く誘ってもなかなかやりたがらない子もいる。
- ・他の運動遊び（たけうまや、ホッピング等）に誘うと、興味を持ってやりはじめるが、できないとすぐに諦める姿がある。
- ・友達と一緒に誘い合って遊ぶ姿が見られる。

《保育者の願い・ねらい》

- ・諦めずに取り組み達成感や充実感を感じてほしい。・色々な運動遊びに挑戦してほしい。
- ・友達と一緒に運動遊びに取り組み、目標に向かって繰り返し試したり、挑戦したりする。

《環境構成と援助》

- ・色々な運動遊びの項目を記し、それぞれの回数は自分で設定させて、達成できたら手裏剣がもらえる「忍者の修行カード」を用意する。
- ・壁に貼り、友達と競い合いながらも、励ましたり認め合ったりできるように、達成状況が見える化する。
- ・帰りの会などで頑張っている姿や、達成した姿などを紹介することで、友達からの刺激もうけやる気を持たせていく。



〈やってみようかな〉

運動遊びに進んで取り組まないR児、N児に誘われてやってみようかなと始めるが、うまく乗れないのでなかなか続かない。今度はタイヤ跳びをしているK児に誘われ「やってみよう」と挑戦する。最初は跳べずにタイヤの上に座り込む、それを見て跳べる子達が、「大丈夫思いっきり跳んでお尻をもっと前に出して」と教えながら、応援し始める。

何日か誘われて挑戦しているうちに跳べるようになり「タイヤ跳びクリアしたよ～手裏剣1こゲット!」と喜ぶ姿があった。

その後、自信が付き他の運動遊びにも自分から挑戦するようになってきた。



《実践事例2の考察》

- ・「忍者の修業カード」と題したチャレンジカードを作成したことで、苦手意識からあまり運動遊びをしてこなかった幼児も、興味を示し挑戦しようとする姿が見られた。

IV 実践の振り返り

1. 成果

- ・子どもの声に耳を傾け、子どもが今、何に興味や関心を持っているのか、思いに寄り添いながら見守り、必要に応じてアドバイスを与え、遊びに必要な材料と一緒に考え準備をし環境を整えることで、主体的な遊びが発展し遊び込む姿が見られた。
- ・ドキュメンテーションを張り出したことで、保護者からの声かけや励ましがあがり、さらに挑戦する意欲が高まった。

2. 課題

- ・運動遊びの項目は幼児が自ら考えた方が、遊びに向かってより主体的に取り組む姿になるのではと思った。

V 今後の実践に向けて

- ・今後も幼児一人一人の実態を把握し、思いに寄り添いながら、主体的に遊び込めるような環境構成や援助の工夫に取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉文部科学省 平成30年『幼稚園教育要領解説』

幼児教育と小学校教育との円滑な接続について

—子どもの理解を深める教師の繋がり—

宮古島市立東幼稚園 教諭 氏名 根間 玲香

I テーマ設定の理由

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図るためには、幼稚園の教師から小学校の教師に幼児の成長や教師の働きかけの意図を伝えることや幼児と児童の交流の機会を設け、連携を図ることが大切である。そのことを踏まえ、幼児教育と小学校教育の相互理解を図るために語り合いの場を設けることや隣接している幼稚園のみの交流だけでなく、近隣の幼児教育施設との連携を深めていくことが大切だと考え本テーマを設定した。

本園は男児24名、女児7名、計31名の1クラスである。12カ所の保育施設から入園し、ほとんどの子が保育園に通い集団生活は経験しているものの、園から1人だけで入園した子もいて、不安な表情を浮かべていた。同じように今年度小学校へ入学した子どもたちも入園児と同じように小学校入学の嬉しさの反面、不安に思う様子もうかがえる。これまで、小学校から交流会の招待を受けて参加してきたが子ども同士の交流に留まり教師間の交流の時間を持つことができなかった。そこで、職員同士の話し合いが持てるような計画性をもった環境を設定し、園児の様子を伝えることで子どもたちの育ちを共通理解できるようにし、教師同士が繋がることで、具体的な援助や教育が充実できるのではないかと思いこのテーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 幼稚園が結節点となって職員同士で会議をもち、交流会の内容や幼児・児童の育ちの相互理解を深める。
- ② 子どもの育ちや経験してきたことを小学校に伝えるための工夫。
- ③ 小学校との交流会の中で様々な経験や体験が繰り返される事で、小学校生活を身近に感じることができるようクラスでの話し合いの工夫。

III 課題解決に向けた取組 (実践)

(1) 七夕交流会を通して (東幼稚園)

これまでの交流会は、幼稚園のみの参加であったが今年度は保育園、こども園にも呼びかけ、保幼小合同の交流会が実現した。

○交流会に向けた話し合い (Bエリア5園と小学校との話し合い)

◇七夕交流会の持ち方について

- ・七夕飾りを1年生と幼児が無理なく作れるものに決めていく。
- ・こども同士が対話をしながら進めていけるように1年生と幼児をペアにする。
- ・材料や作り方の確認。

◇入学後の子ども達の様子についての情報交換

- ・配慮が必要な子への援助について。
- ・小学校生活について など

○ねらいについて

- ・学年、主体を変えてやりたいことが実現できるように設定する。



① ねらい

幼稚園	小学校
<ul style="list-style-type: none"> ・1年生やお友だちと一緒に歌を歌ったり、七夕飾りを作ったりすることを楽しむ。 ・小学生に憧れを持ち、小学校の環境や教師に親しみを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・七夕飾りを工夫して作ったり、歌を歌ったりすることで季節を感じる事ができる。 ・異年齢で交流する活動やルール、関わり方を考え、楽しく交流する。

② 活動内容

子どもの姿	◎環境構成 ◇教師の援助
<p>《前日までの子どもの姿》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カレンダーの印を見て、交流会までの日にちを指折り数え、楽しみにしている。 	<p>◎カレンダーに交流会の日を表示する。 ◇七夕交流会で飾りを作ったり短冊を書いたりすることを伝える。</p>
<p>《七夕交流会当日》場所：東小学校</p> <p>○自己紹介</p> <p>○飾り作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生は事前に折り方を練習して折り方を園児に教えてくれた。 ・ペアによって教え方もいろいろあり、折り紙を互いに1枚ずつ持って「真似して折ってね」という子や園児の折り方を見て一緒に手を添えて折ってあげる子もいた。 <p>○短冊作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生から「短冊を書いてみよう」とやさしく声を掛けられ嬉しそうだった。 ・書けない子は1年生に書いてもらい、自分で書ける子は1年生に見守られながら、短冊を完成させた 	<p>◎カレンダーに交流会の日を表示する。 ◇七夕交流会で飾りを作ったり短冊を書いたりすることを伝える。</p> <p>◇自分たちでやろうとする姿を見守りながら、援助は必要最低限とする。</p>  

○ふり返り（今日の感想を発表する）

〈1年生〉

- ・幼稚園生に教える事ができて嬉しかったです。

〈園児〉

- ・お兄ちゃんやお姉ちゃんが優しく教えてくれて嬉しかった。一緒に作ることができて嬉しかったです。

〈幼児教育施設職員〉

- ・交流会や話し合いの機会の回数を増やし、情報交換をしていきたい。

〈1年担任〉

- ・事前に学習した「優しく教える」「手伝ってあげる」等の思いやりの言葉を考えて話している様子が見られた。

考察

○交流会に向けて子どもの姿をもとに何度も話し合ったことで、子ども理解が深まり、ねらいや内容が明確になった。

○保幼と小学校がお互いの教育や保育について理解することは、互惠性のある学びへと繋がっていくことを確認できた。

○子どもの実態をもとに計画したが、実際に交流会を行ってみると、子ども同士の関わり方や交流会の時期等、新たな気づきもあり、交流会を持つことの意義を実感した。

(2) 「幼小合同連絡会」を通して（東幼稚園）

① 組織的な取り組みに向けて

これまで幼小接続といえば1年と幼稚園のみの取り組みと考えられることが多かった。小学校1年の担任が「円滑な幼小接続」をスムーズに推進するためには、組織的に取り組む必要がある。そこで、1学年担任と連携して全職員を対象に幼小接続について伝える場を設けた。遊びの中で見られる学びの姿を示したドキュメンテーションや幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿（幼児期で育みたい3つの資質能力）が小学校生活でどのような姿に繋がっていくかについて示した資料を元に合同連絡会で『幼小接続の必要性』について話し合った。小学校の先生方が今後取り組みそうな交流会や保育参観について、様々な意見があがった。



《毎週1回行われる幼小合同連絡会》



《ドキュメンテーション》



《幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿》



校(園)長

行事等を通して幼稚園児と小学生が交流を持つことで、幼小の円滑な接続の推進につながった。
 今後は学びの連続性を意識して、幼児期の遊びを通じた学びを各教科の学びにつなげるような取り組みの工夫に期待したい。



小学校教頭

小学校の授業では教科書に沿った学習が中心になりがちですが、子どもたちが主体的に遊ぶことを通じて学ぶ事の大切さを考えさせられます。反面、そのカリキュラムの違いからギャップを感じて小学校への登校を渋る子がいらないよう、今回のように幼小接続を職員全体で取り組むことはとても重要だと思います。

② 連絡会後に実現した交流会



2年生主催で1年生と近隣の幼児教育施設5歳児がおもちゃランドに招待され参加した。



冬休みに1年教室にて担任によるオープンキャンパスに参加した。

考察

- 幼小接続について小学校の全職員に伝える場を設けたことで、幼児教育への関心が高まり交流会の可能性が広がった。
- 今後、交流会を通して、さらに幼児理解が深まり、組織的な取り組みにつながることを期待したい。

IV 実践の振り返り

- ① 子どもの姿をもとに保幼小で何度も話し合うことで、子ども理解が深まり、以前は出来なかった子どもの育ちの確認や交流会での目的の共通認識が持て、負担なく進めることができた。また、次の計画案も話題に上がり進めやすくなった。
- ② 幼小接続について小学校職員と話し合いを持つことで、相互理解を深めることの必要性を確認することができた。
- ③ ドキュメンテーションを通して、小学校職員や保護者が、幼児教育についての理解を深めることができた。

V 今後の実践に向けて

- ・小学校や幼児教育施設が定期的に話し合いの場が持てるように年間行事計画に盛り込み、体制を構築していく。
- ・小学校で育まれる資質能力を見通した保育の充実を図り、ドキュメンテーションを活用する等、分かりやすく幼児教育を伝えるための工夫をしていく。

《主な参考文献》

- ・文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- ・文部科学省 2024 『幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？』

「幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について」

—対話を通して言葉で表現する力の育成—

宮古島市立平一幼稚園 教諭 西田 千鶴

I テーマ設定の理由

昨年度、幼児教育研究協議会にて架け橋カリキュラムの作成を行い、幼小接続についての理解を深めてきた。その成果として授業参観や保育参観を通して、相互理解が深まり、学びの連続性を意識した実践を図ることができたが、子どもの実態に沿った、主体的・対話的で深い学びの実現を図る保育実践が課題として残った。

本学級は5歳児（1年保育）計27名で毎年10箇所以上の保育施設からの入園があり、その中には集団生活が初めての子もいる。入園後、子ども達は園生活を通してつながりを持つようになり、2学期以降には遊びを通して友達との関わりを深めていく様子が見られる。

幼稚園教育要領第2章第4節言葉の獲得に関する領域「言葉」においては「幼児は幼稚園生活の中で心を動かされる体験を通して、様々な思いを持つ。（中略）親しい相手に気持ちを伝え、共感してもらう喜びを感じるようになる。このような体験を通じて、自分の気持ちを表現する楽しさを味わうことが大切である。また、幼児は・・・（中略）人の話を聞き、自分の経験したことや考えたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうようになることが大切である。」と記されている。そこで、主体的に遊び込む環境のなかでなら友達と対話する場が増えていき、自分なりの言葉で表現したり、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を育成したりすることができ、小学校以降の学びにつながると考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 友達や教師と心を通わせる保育の充実について
- ② 経験したことや考えたこと、感じたことなどを言葉で伝え合う場の設定や声かけの工夫

III 課題解決に向けた取組（実践）

1 幼児教育の充実

小学校においては「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等の取り組みが進められている。幼児教育施設においては、このような小学校以降の学校教育における授業改善等やそれらを通して育まれる資質・能力を見通し、遊びを通して学ぶ幼児教育の特性を踏まえつつ、その充実に取り組むことが求められている。そのため、幼児教育では、個に応じた指導や一人一人のよさを生かした子ども同士の関わりを重視し、子どもの活動を通して協同性を育てていることの意義についても再確認をしながら、幼児教育の充実を図っていくことが重要である。

主体性や協同性を育てるためには、子どもたちの思いや願いをふり返りで共有したり、困ったことを話し合っ解決したりする場を設けることが大切であると考え。

そこで、話し合い、振り返りの時間を充実させ、子ども同士の関わりや協同性を育てていくことにした。

2 実践事例

(1) 話し合い、ふり返りを通して

《幼児の姿》

- ・園庭で活発に遊んだり、工夫して遊んだりする姿が見られるが、できないことに挑戦すること

を渋ったり、友だちに思いや考えを伝えられなかったりする姿が見られる。

- ・話し合いやふり返りへの意欲は個人差があり、テーマや話題によってアイデアを出したり、自分の気持ちを話したりする姿が見られる。

① なわとびあそびを通して

子どもの姿	◎環境構成 ◇教師の援助
<p>《なわとび記録会のふり返り》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ライバルの友達に負けたK児が、帰りのふり返りで「なわとびがもっと跳べるようになりたいです」と発表していた。 ・どうしたらなわとびが跳べるようになるのかを子どもたち同士で話し合い「毎日跳ぶ」「練習する」「がんばる」「教えてあげる」等、自分なりの意見を出していた。 ・毎日朝活でなわとびをすることが決まった。 <p>《次の日から…》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・翌日から朝の支度を済ませると、なわとびの練習をするようになった。 ・友達と一緒に跳んだり、教え合ったりしながら朝活に取り組む姿が見られた。 	<p>◇「上手に跳べるようになりたい」という子どもの思いから話し合う場を設け、協働的な学びにつなげる。</p> <p>◎跳べない子へは、持ち手が長い縄跳びを準備</p>
<p>《運動会に向けて》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会でやりたいことをクラスで話し合ったところ、1学期から頑張ってきた縄跳びにチャレンジしたいという意見が多くでてきた。 ・披露したい技について話し合い、「たくさん跳びたい」の他になわとび以外の遊びの「へび」「クロス」などを取り入れたいという意見が出た。 ・遊びの時間も音楽に合わせて動いたり、友達と一緒に体を動かしたりしながら楽しんでなわとびに触れている。 ・練習が進むにつれて、飽きている様子が出てきた。 ・話し合う中で「かけ声をかける」「背中をまっすぐ歩く」「前を向く」という意見が出た。 ・みんなで決めたことを実践し、練習を重ねていくうちに一体感を感じている様子が見られた。 <p>・練習後の話し合いやふり返りを通して、友だちの考えを聞いて試してみたり、困り感を共有して解決したりする経験を重ねたことで、本番は自信を持って披露する姿が見られた。</p>	<p>◇子どもの「やりたい」を運動会の表現につなげ、練習や運動会に主体的に参加できるようにする。</p> <p>◇協働的な活動につなげられるようペアやグループ活動を取り入れる。</p> <p>◇ふり返りでは、友だちに教えてもらったことや教えたことを共有し、協働的に学び合う良さを実感できるようにする。</p> <p>◇子どもの困り感を共有し、子ども同士で教え合ったり、助け合ったりできるようにする。</p>

② 学習発表会に向けて

幼児の姿	◎環境構成 ◇教師の援助
<p>《学習発表会に向けて》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会に向けた話し合いで「6年生が運動会で踊ったエイサーを踊りたい」「お姉ちゃんと同じしなこが踊り合い」という声が出てきて、エイサーチームとダンスチームに分かれることになった。 ・エイサーチームは、それぞれ自分の大太鼓を作ることになり、少しずつ進めている。 <p>・作っている途中の大太鼓を見せながらふり返りを行った。 K児「太鼓は赤だから、赤くしたらいいと思う」 E児「あと、点々もあるから、黒い丸を描くといいかも」 T「赤くするためにはどうしたらいいかな？何を使ったら本</p>	<p>◇ 教師が発表することを決めるのではなく、子どもたちがやりたいことを話し合えるように話し合いの場を設けた。</p> <p>◎イメージしやすいようにエイサーや大太鼓の写真を貼る。</p> <p>◎試行錯誤しながら、より本物らしく作ることができるように、それぞれの太鼓を見せ合い、ア</p>

<p>物みたいにできるかな？」 R児「マジックで塗る？」 K児「絵の具がいいよ」 E児「赤い折り紙を貼ったらいいんじゃない？」 K児「それだと折り紙がたくさんだからもったいないよ」など意見が出てきた。 ・ある程度形が出来上がり満足していた子ども達だったが、友達のアイデアを聞き、もっとカッコ良くしたいという気持ちが芽生えていた。</p>	<p>ドバイスし合う時間を設ける。</p> 
<p>ふり返りのときにエイサーの練習方法について話し合った。 T:「踊りの練習、どうしようか」 Y児:「俺が教える。6年生にお兄ちゃんがいるからわかる」 K児:「Yは少ししかわからないだろ」 T:「6年生のお兄ちゃん達はカッコよく踊っていたね」 R児:「お兄ちゃんたちからエイサー教えてもらえばいいんじゃない」 Y児:「あっち(小学校)にお兄ちゃんいるよ」 T:「じゃあ、昼休みをお願いしに行こうか」 ・小学校の昼休み時間に合わせ、6年生の教室までみんなで行った。 ・後日、6年生から教えてもらえることが決まり、練習日を楽しみにする姿があった。</p>	<p>◇6年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんと関わりながら練習ができるような声かけを意識する。 ◇事前に6年担任と連携しておく。</p> 
<p>・園でも互いに教え合ったりしながら踊りや立ち位置についても自分たちで積極的に話し合う姿が見られた。 ・本番では自分たちで作った大太鼓を持ち、堂々と踊ることができ、達成感と充実感を味わうことができた。</p>	

IV 実践の振り返り

1 成果

- ① 遊びの中で、発見したこと、考えたこと、感じたことなどを教師や友達と対話したり、ふり返りで共有したりすることで相手のよさに気付いたり、協同して活動したりする楽しさにつながった。
- ② なわとび遊びや学習発表会に向けての話し合いを通して、子ども同士の関わり合いが深まり、もっと良くしたいという探究心にもつながった。

V 今後の実践に向けて

課題	対応策
小学校の教育内容や指導方法などについての理解	授業参観や小学校教諭との語り合う場を計画的に実施
小学校で育まれる資質能力を見通した保育の充実	子ども同士の関係性や探求心を育む保育の充実

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 2018「幼稚園教育要領」「小学校教育要領」
2022「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」
「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料(初版)」
2024「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？」
沖縄県教育庁義務教育課
令和5年10月 「保幼小の育ちをつなぐ「黄金っ子架け橋サポートガイド」
教育技術 新 幼児と保育 BOOK 「子どもが対話する保育 サークルタイムのすすめ」 小学館

好奇心や探究心をもって身近な自然に関わる子の育成

—保育ドキュメンテーションの作成を通して—

石垣市立あかし幼稚園 教諭 入与那国 絹江

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説 第2章 第2節 3身近な環境との関わりに関する領域「環境」のねらい(1)において、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味・関心をもつ」と示されている。また、幼稚園要領にある5領域の「環境」中には、「園児が身近な環境に興味をもち、親しみをもって自ら関わる事が重要であり、そこから、自分なりに試したり工夫したり、友達と力を合わせたりしながら遊びを展開とし、さらには、自ら遊びの継続や発展へとつながっていく。」とある。これらのことから、幼児期に自然環境と触れ合う体験を十分に経験することが大切だと考える。

本園は5歳児2名 4歳児1名 計3名の極少規模園である。幼児は石垣島北部の海や山に囲まれた自然豊かな環境の中で育ち、園生活においても草花や木の実を遊びに取り入れる姿がみられる。その一方で、自然と触れ合う機会は多いものの、草花や樹木の名前・種類をあまり知らずに遊んでいる様子が伺える。このような実態から、草木の名前や性質・特徴を知る活動や興味・関心を持って自分なりに考え試す活動を取り入れることで、学んだことを活かして遊びに発展できるような実践につなげたいと考えた。このようなことから、身近な自然に親しむことができる直接体験を充実させるための環境構成と援助の工夫を図ることで、好奇心や探究心をもつ幼児が育つであろうと考え主題設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1. 草木の名前や性質・特徴を知る活動や、興味・関心を持って自分なりに考え試す活動ができるような環境構成の工夫。
2. 身近な自然に親しむことができる直接体験を充実させるための環境構成と援助の工夫。
3. これまでの活動を振り返ったり、成長を実感したり、次の学びにつなげたりするための保育ドキュメンテーションの作成。

III 研究計画

月 日	研究内容
研究計画 4月～8月	幼児の実態把握、テーマ設定 実践研究、考察(実態把握)、環境の構成作成文献による研究 ↓ (1) 身近な自然親しむとは (2) 好奇心・探求心とは (3) 保育ドキュメンテーションとは (4) 援助や環境構成の工夫
7月1日	実践1 花びらを使った色水遊び「お花くちゅくちゅ」
9月6日	実践2 くわの実でジャム作り「木の実 おいしくなあれ」実践3 草木
11月7日	や草花の名前を知ろう
11月22日	実践4 木の実を使った遊び「秋ランド」公開保育
2月～3月	(保育実践→保育実践考察) 研究のまとめ

IV 課題解決に向けた取組 (実践)

園児の姿：園庭に咲いている花で色水遊びを楽しむ姿が見られた。女兒が、繰り返し色水遊びを楽しむ姿を見て、これまで興味を示さなかった子も「やってみたい」と色水遊びが広がった。

教師の願い：身近な植物に興味を持ち、発見や気づきを友だち一緒に味わって欲しい。

園児の姿	☆教諭の援助 声かけ ◇環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・袋に園庭に咲いている花と水を入れて色水遊びをしんでいた。鉢・おろし器等を準備する。 ・道具を準備することにより、色の変化に気付いた。 ・色水遊びからスライム作りへと遊びが広がった。 	<p>◇様々な方法で楽しく活動できるように道具（すり鉢）</p> <p>☆色の濃さや色の変化に気付いて欲しいと思い、石鹼水を用意する。</p> <p>声かけ「この花だと どんな色水ができるかな？」</p> <p>「混ぜたら どうなるかな？」</p>
<p>◇色水を活用し、スライム作りの用具を準備する。</p> <p>考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色々な種類の色水の特徴を感じ取り、試したり工夫したりする中で発見や気づきが見られた。 ・試行錯誤しながら遊ぶことで、好奇心と探究心が芽生えにつながったと考える 	

園児の姿：・くわの実がなっていることに気づき、喜んでいて。くわの実を収穫し、お皿に盛りつけし、友達や先生に「どうぞ！」と配っていた。

教師の願い

・収穫し、調理活動することで「食」への興味・関心を深めてほしい。

園児の姿	☆教諭の援助 声かけ ◇環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・くわの実を見つけ収穫し、盛りつけを行い、先生達に配っていた。 ・「ジュース作れないな？」 「ジャム作れないな？」と発展した会話があった。 ・ジャム作りに必要な道具や材料を考えていた。 	<p>◇園庭に実のなる木や植物を植える。</p> <p>声かけ「そのまま食べても美味しいけど、他にどんな食べ方があるのかな？」</p> <p>「ジャムを作りに必要なものは、なにかな？」</p> <p>☆ジャム作りを提案し道具や材料を準備する。</p>
<p>考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木の実を収穫し、教師が感動を共感し、発展的な遊びを取り入れることができた。 ・直接体験することにより、「食」への興味・関心が深まったと考える。 	

園児の姿：木の実を使って製作活動を楽しむ姿がみられた。1年生から「秋ランド」のお招きして頂き「ゲームコーナーを作りたい。」と遊びが広がった。

教師の願い：秋ランドを通して、自然物に興味を持ち、発見や気づきを味わって欲しい。

自分で遊びを創り出す面白さを実感しこれからも遊びを創り出そうと思ってほしい。

園児の姿	☆教師の援助 ♡声かけ ◇環境構成
<p>役割分担し、ゲームコーナーを行い、チケットを受け取り、ルール説明をすることができた。 【協同性・社会生活との関わり・言葉による伝え合い】</p> <p>自ら進んでスリッパを並べたり、「いらしゃいませ」と元気よく挨拶したりする姿がみられた。 【自立心・道徳性・規範意識の芽生え・言葉による伝え合い】</p>  <p>「次の人が使いやすいように置いて下さい。」と次の方（相手）の気持ちを考えることができた。 【道徳性・規範意識の芽生え・言葉による伝え合い】</p>	<p>◇身近にある自然物を準備し、いつでも使える環境を設定する。 ☆緊張している幼児の気持ちを受け止め、援助する。 ♡「お客さんに何て声かけしようか？」 ♡お客さん（相手）の気持ちを考えることができる</p>  <p>「何を触っているの？」 「ふわふわしているね。」</p> <p>って素敵だね。</p> <p>◇「秋ランド」の設定をみんなが楽しめるように幼児と一緒に環境を整えていく。 ☆幼児が自分なりに工夫して、「秋ランド」に取り組む姿を受け止め最後までやり遂げられるように支えていく。</p>
 <p>「木のえだとつるで釣りざおが作れるよ！」</p> <p>「ゲームがしやすいように長さ短くするね。」「この場所からやって良いですよ。」と工夫する姿がみられた。 【思考力の芽生え・豊かな感性と表現】</p>	 <p>「カラン 木の実をいれるといい音がするよ。」</p>

考察

- ・身近な植物をより身近に感じ植物（木の実）への興味・関心が深まったと思われる。
- ・好奇心や探究心が育まれ自分で遊びを工夫する姿がみられた。
- ・お客さん（相手）のことを考え、気づき、言葉での伝え合いが多くみられた。

V 実践の振り返り

【保育グループリフレーションの様子】

1. 成果

- ・ 幼児が自分自身の活動を振り返ることができ、そこから新たな気づき生まれ、友達同士刺激を受け次の遊びにつながった。
- ・ 保育ドキュメンテーションを活用することで幼児の遊びや育ちに対する読み取りが広がり保育の向上につながった。
- ・ 園の玄関に掲示することで幼稚園での活動内容や活動から幼児に育ちを保護者へ分かりやすく伝えることができた。



2. 課題【保育グループリフレーションの協議より】

- ・ 集団の育ちの捉え方についての議題が上がった。極小規模園なので、なかなか集団として育てるという事は難しいが、今後意識していきたい。
- ・ 個の園児に気をとられ全体が見えなくなるという自分の癖があると指摘された。「一人一人=個」を尊重しすぎると收拾がつかなくなるので、「全体をみながら個をみる意識」 バランスの大切を意識していきたい。



VI 今後の実践に向けて

- ・ 保育者の能力向上つながる。保育活動を振り返ることで活動の進み具合や「良かった点・悪かった点」をしっかり確認でき、次の活動の改善につなげることができる。また、幼児の育ちや遊びを読み取ることで幼児理解を深まるので、今後も継続していきたい。
- ・ 保育ドキュメンテーションを玄関に掲示し、保護者とコミュニケーションがとりやすくなり、幼児の様子や成長を写真で伝えることで園への理解や連携にもつながるので今後も継続していきたい。
- ・ 保育ドキュメンテーションを幼児目線で掲示することで、幼児自身が活動の振り返りができ、次への活動へと繋がったので、今後も継続していきたい。
- ・ 保育グループリフレーションの中で、「保育ドキュメンテーションに幼児期の育ってほしい10の姿を入れると良い。」という意見をもらい、自分自身に足りない視点だと気付いたので取り入れていきたい。
- ・ 主体性を磨くためには、声かけが重要である。意識的に幼児に考え決定させるような意図的な声かけが大切である。適切な声かけをすることで幼児の自己肯定感やチャレンジ精神を育むことができ、豊かな人間関係を築く基礎を養うので、今後も意識して継続していきたい。

<主な参考文献>

- ・ 文部科学省 2018 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館
- ・ 大豆生田啓友・岩田恵子編集 保育ドキュメンテーションの作り方 西東社
- ・ 大豆生田啓友・おおえだけいこ編集 保育ドキュメンテーションのすすめ 小学館

豊かな感情体験を通じた生きた知識や言葉の獲得を目指して

—自然や素材とかかわる生活の中で—

竹富町立うえはら幼稚園 教諭 光村 智香子

I テーマ設定の理由

近年のデジタルメディアの普及の中で、幼児は多くの知識や言葉は無意識に浴び、獲得している。本学級は2年保育の4歳児7名（男児2名、女児5名）であり、うち男児1名、女児3名の計4名は入園前より保育所で2年間を共に過ごしている。言葉のやりとりやおしゃべりが好きな学級である一方で、テレビやスマートフォン、インターネットの動画といった身近なデジタルメディアを通して得た情報を話題に挙げる幼児も多く、やりとりが情報交換になっていたり、会話の中でも内容ではなく言葉のみを受けて「知ってる」と会話を終わらせたり、遊びの振り返りを「楽しかった」の一言で済ませる等、会話が深まりにくい様子が見られた。また、そこにはものの本質ではなく様々な情報を“知っている”ことを褒める、大人言葉を使う幼児を可愛いと注目し助長する大人の姿や、“知っている”ことを重要視して優越感を感じ、満足している幼児の姿も多く見られた。しかし、そのようにして得た知識や言葉は、幼児教育の基本である環境を通して育まれるそれとは相反するものであり、幼児教育において育みたい資質・能力の育成にもつながりにくいと考えられる。

そこで、幼児自らが主体的にかかわり心を揺らして遊び込む中で獲得していく知識や言葉を“生きた知識や言葉”と捉え、それが新たな遊び（学び）の創造や深まりのもととなるよう丁寧に育んでいきたいと考えた。

II 課題に対する具体的な手立て

1 生きた知識や言葉とは

幼児期は、幼児が自発的・主体的に人やものとかかわりながら、遊びを通して必要な能力や態度などを獲得していく時期である。そのため、幼児教育では、幼児一人ひとりが自ら興味や関心をもって、遊びに夢中になる中で試行錯誤しながら、様々な経験を重ねていくことを大切にしている。このような生活の中で獲得される知識、言い換えると、実体験を通して疑問をもち、自分なりに解釈した結果が生きた知識となるのではないかと考える。また、幼児の本当の思いをのせた言葉を生きた言葉と捉え、言葉が自分の気持ちを相手に伝えてくれるものだ実感できることを大切にしたい。

2 豊かな感情体験が生まれる遊びとは

(1) 幼児がそのものと対話しながら遊ぶことのできる「可塑性のある素材遊び」

幼児がじっくりとそのものに向かい、かかわっていくことで様々に変わり続ける素材は、幼児の探究心をくすぐり、たくさんの「わかった！」を生み出していく。変化に出会うたびに幼児は心を揺らし、繰り返しかかわり、遊びに没頭していく。

(2) 幼児の思いを全て受け止め、存分に遊び込み、遊びきることのできる「自然の素材遊び」

自然物とのかかわりは、普段の生活の中にある枠から幼児の心を解放する。幼児は思いのままに遊ぶ中で、音や色、手触りや味、匂いなど自然にしか創り出すことのできない刺激に触れながら、自由な心で遊ぶ心地良さを味わっていく。

(3) 思いもしない出来事が起こる「飼育物との生活」

飼育物は時に予測不能な出来事や様々な問題を引き起こす。また、そこには幼児の主体性を中心にした生活（創り出す保育）ではなく、飼育物を主体にした生活（寄り添う保育）が展開される。飼育物を囲んで幼児と教師、保護者が同じ土俵に立ち、思いを巡らせるトキが流れる。

3 生きた知識や言葉の獲得を促す環境構成や援助を探る

幼児が本物と出会う機会を多くもち、自分なりの「なぜ?」「どうしたら?」「なるほど!」「わかった!」を引き出していくには、どのような環境構成や援助が有効であるか考えたい。その根底には「楽しい!」「もっと!」があることを踏まえ、幼児一人ひとりの意欲と達成感が満たされると共に、集団の中で育ち合える遊びや生活を創ることを目指したい。

III 課題解決に向けた取組（実践）

1 実践事例1「“どろんこどろちゃん”と遊ぼう!」—土粉粘土の遊びを通して—（6月）

- * 幼児の実態・自分の思うとおりに遊びを進めることに喜びを感じ、経験したことのある素材での遊びは「知ってるからしなくていい」と断ったり、出遅れると参加しにくい幼児の姿が見られる。
 - ・ 友達関係が固定しており、言葉を巧みに使う幼児に反論しにくい様子が見られる。
 - ・ 遊びの感想が「楽しかった」の一言で済まされ、言葉と表情が合わない姿も見られる。
- * 教師の願い・様々な遊びに興味をもって参加し、一人ひとりが自分なりのおもしろさを見つけたり、見つけた喜びをたくさん味わってほしい。
 - ・ 自分の思いを自分なりの言葉で表したり、聞いてもらう嬉しさや満足感を味わってほしい。
- * 環境構成・土粉粘土に親しみをもてるよう、はじめに絵本『どろんこどろちゃん』を見る機会をもつ。
 - ・ 一人ひとりが落ち着いて自分のしたいことに取り組めるよう、場を広く取り、十分な数の材料、用具を準備しておく。また、自分のタイミングで遊びに参加できるよう、遊びの場は2週間ほど置いておく。
 - ・ みんながおしゃべりの感覚をもって思いを話れるよう、輪になり振り返りの場をもつ。
- * 教師の援助・みんなが安心して遊ぶことができるよう、教師も遊びの場に入り、土粉粘土がいろいろに変化していく様子に共に驚いたり喜んだりするなど、思いを素直に出しながら一緒に遊びを楽しんでいく。その際、幼児の思いや試しの前に出すぎないように留意する。
 - ・ 幼児の発見や探求の機会が多くもてるよう、さりげなく水の量や土粉の量を調整したり、遊びの様子を見ながら新たな用具を出したりしていく。
 - ・ 個々の幼児の試しや気づきが確かなものになり、自信につながっていくよう、幼児の思いを言葉で返しながらかんじたり、具体的な言葉で認めたりしていく。
 - ・ 振り返り際には、感想ではなく「みんなへのお知らせ」として、話したいことがある幼児の話を普段の言葉を使って尋ねていく。
- * 幼児の姿・土粉粘土という初めて出会う素材であったことや、さらさらの見た目やふわふわの感触に喜んでかかわる様子が見られた。歓声や感触の言葉で素直に喜びを表したり、自分なりにかかわって遊ぶ姿が多く見られ、日を追うごとに楽しかった遊びを繰り返したり、友達の遊びに刺激を受け、取り入れて遊んだり、じっくり遊び込むことを楽しんだ。
 - ・ 振り返り際には、ですます調で緊張しながらも自分も話したいという気持ちが表れ、「楽しかった」の後に「明日もしたいなあ〜」と思いを馳せる姿も見られるようになった。

- *考 察・自由な気持ちでかかわれるよう環境を整えていったが、土粉粘土の量に限りがあることや、ブルーシートや日除けがあることで思いがけず遊びの枠を作っていたのではないかと、幼児の心の解放・開放を慮りながら、再度教材研究を重ねたい。
- ・幼児の思いを引き出す安心できる場作りや教師との信頼関係を考え直す機会となった。

2 実践事例2「ウジ虫飼育論争」ーウジ虫を飼う？飼わない？ー（10月）

- *幼児の実態・互いにやりとりを交わしながら遊ぶ様子が見られるが、口調で押し切る姿も見られる。
- *教師の願い・友達の話に最後まで耳を傾け、思いを出し合う心地良さを味わったり、自分とは違う友達の考えのおもしろさに気づいたりする機会となってほしい。
- *環境構成・ウジ虫に心を寄せて考え合うことができるよう、飼育の場をそのまま話し合いの場とする。
- *教師の援助・幼児同士のやりとりが気持ち良くでき、一人ひとりの思いがきちんと伝わるよう、言葉を足したり言い換えたり確認したりしながら話の中継役となって見守っていく。
- *幼児の姿・ウジ虫に心を寄せ、自分の思いを自分なりの言葉で伝えようとする姿が多く見られた。
- *考 察・言葉で伝え合うには、仲間関係や思いの強さ、自信などが互いに関連することがわかった。

IV 実践の振り返り

1 成果と課題

- ・友達との世界を広げていきたい時期でもあったが、一人ひとりが自信をもち集団の中で自分らしさを発揮していくためにも、様々な素材とのかかわりを通して個々の世界を十分に深める活動を多くもってきたことは有意義であった。
- ・教師の思いが大きく、教師主導型に陥っていたのではないかと。少人数であること、単級であること、身近に保育施設が少ないこと等、難しい点も多いが、日々の保育について話をする機会や保育を見合う機会をもてるよう、積極的に声をかけていきたい。

2 実践を通じた気づき

- ・幼児の姿やその背景の見取りの浅さや自身の保育を振り返る観点の甘さを痛感した。経験からの固定観念ではなく、常に幅広い価値観をもって保育に臨んでいきたい。

V 今後の実践に向けて

幼児の遊び（学び）において、自然や素材とのかかわりは欠かすことのできないものである。今後は、自然や素材についての教材研究を深めつつ、幼児の思いと教師の思いのバランスやタイミングを見極めながら、そっと遊びの種を蒔いていくことや、園外に広がる豊かな自然も保育の中に活かすことができるよう、さらなる工夫を心がけていきたい。そして、幼児が言葉に自分の気持ちをのせて話すことができるよう、話したいことがきちんとある生活を保育の中で保障していきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 2024 『幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？』 東洋館出版社
 戸田雅美・和田万希子 2022 「保育の場で「ことば」から子どもに出会う」『発達172』 ミネルヴァ書房
 小泉英明 2023 「感性と表現はどう育つ？脳科学の視点から」『ほいくあっぷ』 学研
 江村和彦・陳惠貞・武小燕・江上信子・栗山陽子・藤林清仁・佐々木俊郎 2014
 「子どもの心とからだを拓く自然保育・教育ー土粉活動の展開事例を中心にー」
 『名古屋産業大学・名古屋経営短期大学環境経営研究所年報（13）』

非認知能力を育てる保育実践

—集団遊びを通して—

うるま市立与那城こども園 保育教諭 森根 愛里

I テーマ設定の理由

現代の社会は情報化やグローバル化が進み、より複雑になり続けている。生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児期の教育において、ひとり一人の力を存分に発揮し、他者と目標を共有し、知恵を出し合い、それぞれの持ち味やよさを生かしながら、より良いものを創造していく「非認知能力」を幼児期から育てることが求められる。幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、幼保連携型認定こども園において育みたい資質・能力の中で「心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする」と示されておりその中における「学びに向かう力、人間性等」がもととなり「他者との協調」「自制心」の基礎につながっていくとある。

本学級の園児『3歳児（3年保育）計16名』の実態として、集団での生活が初めてで不安や緊張が強い子や、「イヤ」「自分です」と主張したり、うまく気持ちを表現できず、かんしゃくを起こしたりする子もいる。園生活において、思い切り自己を発揮しながら遊ぶ経験を保障することは大切だと実感している。発達を捉えた生活や遊び、活動の中で経験すべきことを保育者自身が見極め、集団遊びを通してルールのある遊びに興味をもって参加することで、協調性や自制心の育ちにつなげていきたいと考え本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 集団遊びを通して、友達や保育者と一緒に遊ぶ楽しさを感じる経験を重ね、自己発揮や活動への意欲につなげていく。
- 2 遊びを通して、「協調性：みんなで同じ遊びを楽しむことで仲間意識を感じる」「挑戦意欲：何かをするという目的意識を持って取り組む」「自制心：思い通りにいかなくても自分の気持ちを調整しよう」としたり、切り替えようとしたりする」

III 課題解決に向けた取組（実践）

◆実践事例1：「あぶくたった」 ～みんなで遊ぶって楽しいね～ （6月頃）

《幼児の実態》

絵本を見たり、歌をうたったりしながら興味を持って集まりに参加する姿が見られるようになる。また友達や保育者と一緒に、リズムに合わせて体を動かすことを楽しむ幼児が多くいる。しかし中には、集団遊びや活動に消極的で保育者に手を引かれて参加したり、遠くから傍観したり、泣き出してしまったりする幼児も数名いる。また、遊びや活動の中での気持ちのコントロールが難しく、気持ちが著しく昂ったり、動きが大きくなったりしてしまう幼児もいる。

《保育者の願い》

- ・ 集団遊びを楽しむ中で「友達と一緒に遊ぶって楽しい」と感じてほしい。
- ・ 遊びの中で自己発揮し、認められる喜びを感じ、活動への期待感、意欲につながってほしい。

《環境構成》

- ・ 幼児が十分に走り回ることができる広い場所を用意し、「家」に見立てたゴザを用意する。
- ・ 絵本や歌で子どもたちが、物語をイメージして遊びが展開できるようにする。



あぶくたった



《保育者の援助》

- ・絵本の読み聞かせや歌をうたうことでよりイメージが持てるようにする。
- ・リズムに合わせて体を動かすことを楽しみながら意欲的に集まることができるようにする。
- ・遊びや活動に消極的な子には個別で声をかけ、その子なりの参加の仕方を考えながら関わり、「友達と一緒に遊ぶ楽しさ」を感じ意欲につながるようにしていく。
- ・子どもたちの声に耳を傾けながら、一緒に遊びを楽しむ。また、こどものイメージしたことや言葉を拾い、言語化して周りの子どもたちにも伝え楽しめるようにしていく。

《幼児の姿》

- ・歌や絵本で慣れ親しんできたものであったため、ほとんどの子が意欲的に参加し、自分なりのイメージを広げながら楽しんで切る様子が見られた。
- ・歌詞の「お風呂に入って」の部分では「髪の毛は手でこうやって洗おう」「体もゴシゴシしよう」など家庭での自分の生活を思い返しながらか表現している様子が見られた。
- ・「トントン」「何の音？」などの言葉の掛け合いを楽しんでいる様子が見られた。

《考察》

- ・絵本や歌があったことで子どもが視覚的に情報を得ることができ、イメージを膨らませ、遊びに入り込むことができた。
- ・「お家に帰って」と生活での活動が取り入れてあることで自分の経験などを思い出しながらか楽しむことができた。
- ・「追いかける人（鬼）」「逃げる人」などの簡単な役割があったことで、ルールを理解もスムーズにできた。

◆実践事例2：「しっぽ取りゲーム」 簡単なルールのある遊びに触れて（9月頃）

《幼児の実態》

簡単なルールを理解して、友達や保育者と一緒に遊びを楽しむ姿が見られ、身体を動かすことを喜び、積極的に遊びに参加する子が増えたが、中には不安や緊張が強く消極的な子もいる。「しっぽがとれない」「とられた」など自分の思い通りにならないことが起こると、悔しがり泣き出す子がいる。

《保育者の願い》

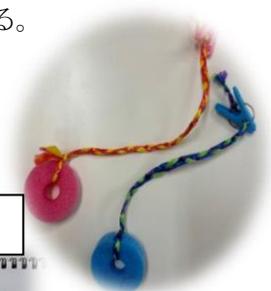
- ・保育者や友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わってほしい。
- ・保育者の話をよく聞いて、簡単なルールを理解して楽しんでほしい。
- ・「ねずみ」や「ねこ」に自分なりになりきって楽しんでほしい。

《環境構成》

- ・幼児が十分に走ることでできる場所を確保する。事前に約束事を確認し、安全に留意する。
- ・子どもたちがしっぽをとりやすいように教材研究をし、工夫した道具を用意する。
- ・「ねずみ」と「ねこ」の掛け合いの歌のスケッチブック等を用意し、視覚的に楽しめるようする。

《保育者の援助》

- ・幼児が親しみを持って楽しめるように、日ごろの保育の中でも、歌をうたったり、スケッチブックシアターを取り入れたりする。
- ・保育者も一緒に遊びに参加して「ねずみ」や「ねこ」になりきって楽しむ姿を見せる。
- ・活動に消極的な子には個別に声をかけ、その子なりの参加の仕方を楽しめるようにし、興味が持てるように援助していく。
- ・悔しくて泣いたり、怒ったりする子には気持ちに寄り添いながら、「〇〇さんは一生懸命逃げたからとられて悔しかったんだね」本児の頑張りを肯定的に認める声掛けをしていく。
- ・活動の中で子どもを認める声掛けを意識し、「〇〇さんは、△△だったね。すごかったね」など子どもの名前を添えて褒めていく。



紐に洗濯ばさみをつけ、ドーナツ型のスポンジでつかみやすくする



しっぽ取りゲーム

《考察》

- ・年齢に合わせて教材を工夫したことで、遊びを十分に楽しむことができた。しっぽを付けることを喜ぶ子が多く、「やってみたい」という意欲につながった。
- ・ねことねずみに分けて遊びを進めたことで「逃げる」「追いかける」の動きがわかりやすく、ルール理解へつながった。
- ・「しっぽを取られて悔しい」「取られたけどがんばる」などの経験が自己抑制や感情のコントロールの成長につながった。

IV 実践の振り返り

1 成果

- (1) ほとんどの子が友達や保育者と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを知り、様々な活動面で意欲的になる場面が見られた。
- (2) 自己発揮をし、認められる場面の中で、「他者に認められている」という気持ちが育ち、友達とのやり取りがみられ、関わって遊ぶことにも積極的になる子が増えた。
- (3) 「悔しいけどがんばる」「本当は〇〇が良かったけど△△でも我慢する。次にやる」など自分の気持ちを自分なりに自制し、コントロールしようとする子が増えた。

2 課題

- (1) 子どものやる気や意欲を引き出す声掛けや援助の更なる工夫。
- (2) 保育の振り返りを通した個々の自己発揮の保障。
- (3) 研修を通して学んだ保育技術の実践や更なる向上。
- (4) 発達や子どもの実態に適した更なる教材研究。

3 実践を通した自身の気付きや考え、今後の実践に向けて

- (1) どのような教材をつかうと、子どもたちの「やってみたい」「たのしい」の意欲につながるのか、子どもの興味関心を高める関わりや援助について考えることができた。
- (2) 遊びの「ねらい」や「育ちの見取り」を自分なりに行うことで、遊びの展開の仕方を考える機会となった。
- (3) 子どもの声に共感する時や褒める時には名前を添えて話をするように意識することで、特別感になりもっと子どもたちの自信や意欲につながると思った。
- (4) 子どもの言葉や行動に保育者が「言葉」をつけ加えてあげることでより育ちにつながるので「気持ちの一つになると気持ちがいいね。楽しいね。」等、声掛けの工夫が必要だと感じた。
- (5) 歌詞の中に出てくるもの（扉など）もイラストを用意し、イメージしやすく遊びにより入り込めるように工夫が必要だと感じた。
- (6) 遊びや活動が段階的に展開できるように日々の保育や、教材の工夫を図る必要がある。

〈主な参考文献〉

- 内閣府 文部科学省 厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
横山 洋子 2023 『非認知能力が育つこれからの保育』 池田書店
佐々木 晃 2018 『0～5歳児の非認知的能力』 チャイルド本社

豊かな感性や表現する力を育む幼児の育成

— 一人一人の幼児理解から見える視点を持った保育展開を通して —

浦添市立 内間こども園 教諭 大城 さやか

I テーマ設定の理由

近年の子どもを取り巻く社会は、高度情報化等の進化により、常に変化している。スマートフォンをはじめとするデジタルデバイス等が、小さな子ども達にとっても身近なものとなり、子どもの遊びや生活環境にも欠かせないものとなっている。今後は、生成AI等の登場によって社会はさらに進化していくと予測される。こうした状況下が、子どもの感性や表現する力が育つための環境へ、少なからず困難な影響をもたらしているのではないかと考える。

そのため、こども園等においては、幼児が安心して過ごせる環境のもと、日常生活の中で出会う様々な事物や事象に心動かされる体験や、自分の思いや考えを友達等と表現し合うことを通して、豊かな感性や表現する喜びが感じられるような保育を保障していくことが求められる。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(H30,以降,教育・保育要領)では、領域「表現」において、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と示されている。また、豊かな感性や自己を表現する力は、幼児期に自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことで育てられる」とされ、園生活の中で、幼児が感じたことや考えたことを自分なりに表現する経験を重ねていくことは重要であると考えられる。

本学級は、3歳児(3年保育)計16名が在籍しており、子どもたちはそれぞれ好きな遊びを見つけ、保育教諭や友達と一緒に園生活を楽しんでいる。しかし、遊びを楽しむ中で、自分の思いや考えを表現する方法は、年齢的な発達過程からも相まって、まだ少ないように感じられる。自らの保育を振り返ってみても、幼児一人一人が自分なりに表現する充実感を感じられるような保育展開は、まだ十分ではないと考える。そのため、個々への幼児理解から視点を持った保育展開を通して、豊かな感性や表現する力を引き出せるよう保育の展開を改善していく必要があると感じる。

そこで、本研究では、幼児一人一人をよく観察した幼児理解を深めていくことで、見えてくる視点を明確にすることから、環境構成と援助の工夫を行う保育展開を通して、豊かな感性や表現する力を育む幼児を育てたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 一人一人の幼児理解からとらえる保育展開

幼児一人一人をよく観察し幼児理解を深め、個々に見合った援助の工夫による保育展開を行うことから、豊かな感性や表現する力が引き出せるであろう。

2 本研究における『表現』の視点を明確にすること

- (1) 本研究において表現の視点を明確にすることで、環境構成の工夫に繋がる保育展開を行うことから、豊かな感性や表現する力が引き出せるであろうと考える。
- (2) 教育・保育要領解説「表現」の領域では、「園児の自己表現は、極めて直接的で素朴な形で行われることが多い」と示されている。実際に、3歳児の姿から表現そのものをひとくりにすることは難しく、多様な側面があると感じていた。そこで、それぞれの持つ自己表現(見たり、つくったり、か

いたり、歌ったり、言葉で伝えたり、つもりになったり)の姿を、感じたことや考えたことを自分なりに表している姿を『表現』とし、本研究を進める。



Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

◆実践事例：思いや考えをかたちにして伝わる喜びを感じたA児の姿から (3歳児 4月～10月)

《幼児の実態》 (4月頃)

- ・入園当初は、緊張から表情は硬く発語もあまりきかれない。初めてのことは参加を嫌がり、泣いてしまうこともあった。給食時間は、食事を頑なに口にせず、周りの様子を常に気にしている。

《保育教諭の援助》

(幼児理解)

- ・子どもの姿をよく観察し、どんなことに興味をもっているのかどんな遊びが好きなのかを知る。
- ・新しい環境に不安そうにしている姿を受け止め、思いに寄り添うような言葉をかけつつ傍で見守った。見守る中で、本児には「こうしたい」という思いや考え等がしっかりあることに気づく。
- ・小さな物を見つけるのが好きで、拾っては、保育教諭に見せたり、戸外遊びでは、草花や石ころを集めて遊びに没頭している。こうした姿から、本児の好きな遊び等が見えてきた。
- ・その場のつぶやきや姿を記録や写真等で残し、個別にまとめながら個々の援助へつなげていく。

(援助の工夫)

- ・自分の思いや考えを言葉にできるよう、問いの言葉かけや、時に、代弁するような言葉かけの工夫を行った。自分の思いや考えを言葉にできるようになると、伝わる喜びが感じられたようで、徐々に発語が増えて友達とも言葉のやりとりをしながら園生活を楽しめるようになった。
- ・時に一緒に体感しながら「この葉っぱ匂いしてみよう」「この石きれいだよ」「どんな感じかな」と問いかけたり、「きれいだね」と共鳴・共感する言葉かけをするなど、言葉かけ等を工夫し援助を行った。

《環境構成》

- ・園庭等で集めた草花を入れたり小分けできるように、牛乳パックやカップなどの材料を子どもの手の届く場所に用意しておく。
- ・集めたものや見つけたものを飾ることのできるよう、テーブル等を用意し、幼児同士が互いに見たり触れたりできる場の設定をする。
- ・石や草花の種など、誤飲が予測される物は、安全面に配慮した言葉かけ等をし、小さな物は小分けの袋等に入れて展示するなど工夫した。



《幼児の姿》

- ・園生活を楽しむようになると、登園時に、見つけた草花を持ってきては「先生、見てきれいだよ」と、言葉にし、「すてきね」と共感してもらい喜びを感じている。
- ・戸外に出る際には「お花集めする」と言ってカップ等を持って外遊びへ出ていく。「次も、〇〇したい」と期待する気持ちをもって遊びも楽しめるようになった。そのうち、気の合う友達と一緒に誘い合い、草花集めに夢中になり楽しんでいる。
- ・「先生、見て、色が出たよ」と、摘んだ花を触ったりするうちに色がでることに気づいた様子。また、拾った花を水につけていると、翌日に色が出ていることで「青になっているよ」と発見したことを伝えにくる。さらに、透明カップに水と花を入れ、木の枝で花を潰しながら「こんなして、もっとでるよ」と得意気に話す。それからしばらくは、園庭にある草花を集めては、友達と一緒に色



が出る楽しさから、「描けるよ」と、色水で、紙に描けることに気づいたようだった。

- ・粘土で、雨粒、雪、咲いている花、立っている人物（女の子）など、指先を使って丸めたり細長くしたりと、感じたことを細かい部分まで表現する。名前を書いて展示すると、母親や友達に「見て」と言って、作品を見てもらい嬉しそうな様子も見られる。
- ・給食は、徐々に食べられる食材や食べる量が増え、次第に、完食できるようになった。完食した日には「先生、全部食べたよ」と嬉しそうに伝えにくる。
- ・自分の思いや考えを言葉にできるようになると、周りの困っている友達に「大丈夫？」と声をかけ助けてあげる、担任保育教諭に伝えるなどのような姿も見られるようになった。
- ・これまで嫌がっていたことへも、自ら挑戦しようとする姿が見られる。本児なりに苦手と感じていた事へ、自分からやってみようとする姿が見られるようになった。



粘土作品『女の子』

《考察》

- ・その子にとって、今、何が大切なのかが分かるよう見守っていく中で、言葉にならない心の声に耳を傾けることができるよう関わってきた。すると、言葉にならない思いや「こうしたい」との思いに気づいて援助につなげることができた。時に、代弁したり、一緒に草花を集めたり飾ったり援助してきたことで、次第に、その子なりの表現する力が引き出されるようになったと考える。
- ・自分なりの表現ができる喜びから、「次はこうしたい」と更なるイメージにも繋がり豊かな感性も引き出されていったと考える。

IV 実践の振り返り

- (1) 本園の3歳児は、新しい環境ということもあり、安心して園生活が楽しめるよう心の安定を図ることと、幼児一人一人が持つ力が発揮できると考える。本実践では、個々をよく観察し個別の成長や発達過程を知った上で幼児理解を深めることにより、個々に見合った援助と環境構成の工夫から、豊かな感性や表現する力を引き出せることができたのではないかと考える。
- (2) 一人一人の幼児理解から、自分なりの思いや考えを伝えようとする姿を捉えた表現を視点とすることによる保育展開を通して、個々の表現したいかたちが見えてきた。実践を通して、遊びや生活のなかで、幼児が自分なりの表現を、日に日に楽しむようになる姿から、豊かな感性や表現する力が生まれてくることを実感できた。
- (3) 表現方法は、一人一人様々であり、その姿を見る際には視点が重要だと考える。そのためには、個別の姿が分かるような記録があると他職員との共有にもつながり幼児理解の深まりに繋がると考える。

V 今後の実践に向けて

実践を振り返ると、見る側にとって、表現の視点が分かりづらいことに課題がある。今後は、個々の表現する様子をジャンル別（言葉描画・製作・造形作品等）に分け記録など工夫し、これまでの遊びの様子から見える表現方法を可視化していくことでより分かりやすくなるだろうと考える。

（主な参考文献）

- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 ■平成30年 ■『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 ■フレーベル館
- 大豆生田啓友・出原大・小西貴士 ■令和5年 ■『あそびが学びとなる子ども主体の保育実践子どもと自然』 ■学研 Gakken
- 文部科学省 ■令和元年 ■『幼児理解に基づいた評価』 ■チャイルド本社
- 竹永亜矢・埴 和道 ■令和5年 ■美術表現研究 講義『幼児表現画』描画の発達と特徴 ■教育研究論文

幼児の体の発達を促す援助の工夫

— 幼児が自ら体を動かしたくなるような環境づくりを通して —

浦添市立牧港こども園 保育教諭 眞境名 葵

I テーマ設定の理由

近年の社会情勢や情報化により幼児の遊びにも変化があり、玩具やTVゲーム、スマホ等を使った遊びに大きくシフトし、体を動かして遊ぶ機会が減少しているように感じる。

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果」では、H20からH30までは比較的横ばいで改善傾向にあったが、R1において一気に落ち、R5は前年度より改善傾向が見られるものの、以前の水準には達していない。沖縄県においても同様の傾向が見られる。

本クラス『5歳児 計30名』の子ども達も運動能力が発達する1～3歳の時期においてコロナ禍であった為、体力の低下や体を動かすことへの意欲の低下が感じられる。実際、集まりの際に姿勢が崩れてすぐ寝転がったり、立っている時グラグラしたりし、一定時間座ったり立ったりすることが難しい姿が多く見られ、戸外遊びで体全体を使うより、室内で静かな遊びを好む園児も見られる。

教育・保育要領の健康の内容の取扱い(1)では、「心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、園児が保育教諭等や他の園児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」とある。

そこで本研究においては、自ら体を動かしたくなるような環境や活動の選定・工夫を行うことで、その意欲が芽生える。それにより、体力が向上し体幹等が鍛えられ、その結果様々な活動にさらに意欲的に取り組むことができるようになるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 遊びの中で、一人一人の実態把握を行う

- ・保育教諭も一緒に遊びの中で体を動かしながら、園児の実態や課題を把握する。

2 環境の工夫を行う

- ・体を動かす活動を計画し、「楽しそう！やってみたい！」と思うような教材・音楽の選定を行う。遊びの中で、幼児の興味関心を示すものを探し、活動に意欲が高まるような環境の工夫を行う。

III 課題解決に向けた取り組み(実践)

(1)実践事例1：「音楽に合わせて、楽しく体を動かそう」（5月～7月）

〈幼児の実態〉

- ・生き物が大好きな園児が多く、戸外遊びでは生き物を捕まえ観察や世話をする等、生き物への興味関心が高い様子が見られる。日々の遊びの中で、体を動かして楽しむより、静かな遊びを好む。

〈保育教諭の願い〉

- ・静かな遊びやじっくり試したり工夫したりする遊びも大切にしつつ、体を動かすと気持ちがいい、楽しい等心地よさを感じてほしい。同時に友達と同じ動きで楽しい、違う動きで面白い等イメージを膨らませて楽しんでほしい。

〈環境構成〉

- ・斎藤公子著『さくら・さくらんぼリズム遊び』を活用し、生き物の動きのあるリトミックに取り組み、園児が体を動かすことに意欲がもてるようにする。また、製作等で、生き物を作ってイメージを膨らませて楽しむ。



模倣する動物名	園児の動き	意識したい点・意識させたい点
こうま	足指を返して四つん這いをする。	足の指先にまで神経を生き届かせる。
馬	ひざを床から上げて腰を高くして高足のハイハイをする。	足の指先にしっかり床につけ、同時に手の指先にも力を入れる。
馬のギャロップ	手は手綱を持っていることを意識し、利き足が前のまま走る。	リズムに合わせながら、走る・止まるを意識しながら行う。
あひる	股を開いてしゃがみ、上体を起こしたまま腰でバランスをとりながら歩く。	踵を上げて足の指先で上体を支えて歩く。
とんぼ	両足の踵をそろえ、両手は真横に水平に上げる。歌に合わせて全力でかけまわる。曲の最後で、片足を後ろに上げて弓なりになる。	バランス感覚を養い、自分の体を支える。

〈保育教諭の援助〉

- ・保育教諭も一緒に楽しみながら、生き物のイメージを膨らませ、なりきって楽しむことができるようにする。
- ・保護者にもドキュメンテーション等で、リトミックの様子を伝え、家庭でも話題にしたり、動きをまねしたりして楽しむことができるようにする。

〈幼児の姿〉

- ・「見て。先生より腰が高く上がっているよ」「音楽が止まると、ピタッと止まるよ」「踵上げるって難しい」等、自分の体がどう動いているのか意識が高まったり、友達や保育教諭の動きと自分の動きを比べたりする姿が見られるようになった。
- ・音楽をよく聞いて、静と動を意識して活動に参加している。
- ・イメージを膨らませて、生き物になりきって楽しくリトミックに取り組んでいる。

〈考察〉

- ・取り組み始めた当初は、なかなか体の使い方が難しそうな動きでも、繰り返し取り組むことで、段々上手になってきて、できたことを喜び、自信へと繋がったと考えられる。

(2) 実践事例2 「友達と協力して、ゴールを目指そう！」運動会への取り組み(6月～7月)

〈幼児の実態〉

- ・好きなキャラクターの絵を描いたり、塗り絵をしたり空き箱を集めたりして楽しんでいる。
- ・友達と協力して遊びを進める楽しさを味わうようになってきた。

〈保育教諭の願い〉

- ・様々な体の動きを経験し、楽しさを感じて欲しい。
- ・友達と協力して活動を進める楽しさをさらに感じて欲しい。



〈環境構成〉

- ・幼児の好きなゲームのキャラクターの音楽、小道具を準備する。
- ・大きな段ボールやマット等、やってみたい、触ってみたい、どう使う？等、興味をもてるような用具を準備し、すぐ手にとって幼児同士が試すことができるよう、保育室に配置する。

〈保育教諭の援助〉

- ・楽しく体を動かそう！というねらいのもと運動会の競技の内容を園児とともに決めていく。
- ・実践事例1のリトミックを取り入れつつ、体を動かして楽しむ競技を取り入れていく。

〈幼児の姿〉

- ・キャタピラーでは、友達とタイミングを合わせて前にまっすぐ進む難しさを感じ、どうしたら良いのか、自分達で考えて練習する姿が見られた。
- ・マット転がしでは、「せーの」と、友達とかけ声を合わせて転がしていた。

〈考察〉

- ・活動への意欲を高めるため、園児の好きなキャラクターやテーマソングを取り入れ、なりきって楽

しんだことで、家庭でも話題に上がり、運動会本番をみんなで期待をもって迎えることができたのではないかと考えられる。

- ・競技内容を園児と決めたことで、子ども達自身で考えたり工夫したりと主体的な姿が見られたと思われる。

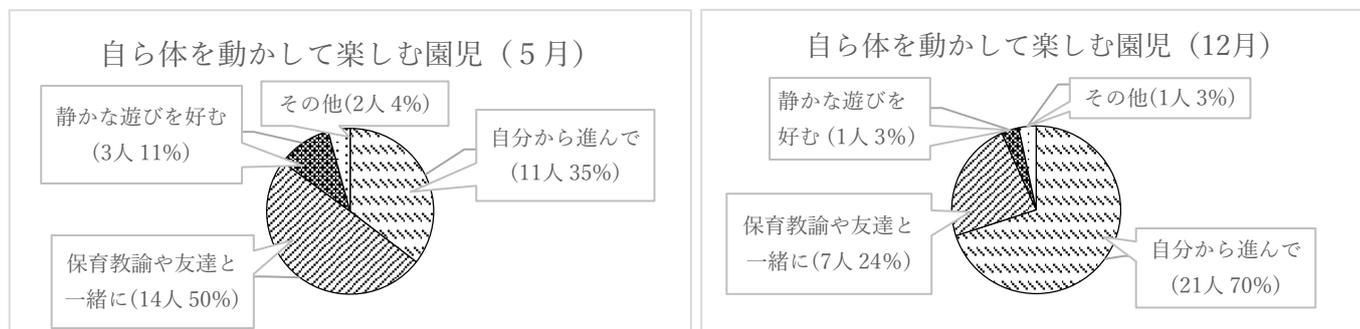


IV 実践の振り返り

進級当初は、室内で塗り絵やブロック等、静かな遊びを楽しむ園児が多かったが、実践を通して体力がついてきたことで、体を動かす楽しさを感じるようになり、戸外遊びを楽しむ園児が増えた。また、活動が途切れることなく、普段の生活の中で継続して楽しむことができるよう、音楽を準備したり、用具をすぐ手に取れる場所に用意したりした。その際には、遊び込む時間の確保を行うことも大切にした。「やってみよう」「できるようになりたい」と、自ら取り組む姿が多く見られるようになった。その経験から、12月に行われた生活発表会の選択種目では、運動遊びの種目に参加したいという園児が多く見られ、鉄棒や縄跳び、跳び箱など、根気強く取り組む遊びにも挑戦するようになってきた。

さらに、園児が興味のある教材を準備することで、好きな動物やキャラクターになりきって、楽しみながら体を動かす活動に参加することができた。

このような実践を行ってきたことで、園児が主体的に体を使った遊びを楽しむようになった。クラスや園全体の集まりでも、最後まで姿勢が保てる等、変化が見られるようになった。立っている姿勢もグラグラすることが減り、それにより集中力も上がったことで、話をしっかり聞くことができるようになった。やるべきこと、やりたいことが自身でわかり、園生活へも自信をもって積極的に参加する園児が増えてきた。



V 今後の実践に向けて

- ・園児の実態を捉え、段階を踏んだ援助や環境構成を工夫し、楽しく実践を行うことを目指す。さらに今後も友達や保育教諭と関わりながら、進んで体を動かす楽しさや気持ちよさが味わえるように環境の再構成や援助の工夫を行っていききたい。
- ・幼児期は心身の発達が著しい時期ではあるが、その成長は個人差が大きいため、一人一人の発達に応じた配慮を行っていく。
- ・就学に向けて小学校学習指導要領体育科の「体づくり運動」につなげていけるような活動の精選を行っていく。
- ・幼児理解をさらに深めて興味・関心に沿った遊びや活動を充実させていきたい。

<主な参考文献>

内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成30年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
 前田綾子・富岡美織 2023年 『イラスト版 斎藤公子 さくら・さくらんぼリズム遊び』
 文部科学省 『運動期運動指針ガイドブック』 幼少期に身につけたい36の基本動作

園生活に自発的に取り組むようになるための援助や環境の工夫

—当番活動を通して—

浦添市 幼保連携型認定こども園みのり幼稚園 教諭 室伏 香奈

I テーマ設定の理由

- ・今受け持っている子ども達は生まれた時にちょうど世界中でコロナが大流行しており、また、SNSやインターネットが発達している中で、人と人の関わり方が大きく変化している時代を生きている。その為、この子達が成長してどのような社会で過ごすことになっても、やりたいことや好きなことを自分で見つけて行動できる子になってほしいと願う。
- ・身近な大人（両親や保育者）の真似を園や家庭で楽しむ姿が見られる。その子ども達の発達に合わせて目的意識を持ったお手伝いを進んで取り組めるように援助や環境の工夫を取り入れたい。さらに当番活動を通して、自分の幼稚園での存在意義を感じたり、自分に自信を持ったり、周りから感謝されることで自己肯定感を高め、自発的な子ども達を育てたいと思ったため。
- ・学級の実態『「3歳児（3年保育）」計30名』である。登園渋りがある子が自分の当番日を楽しみに登園するようになったり、うまく言葉が出ない子や会話を苦手とする子もいる中で、朝の会や帰りの会などのお集まりの時間で発表の時間を設けると、元気よく手を挙げ発言を好む姿が見られたりした。園生活に期待を持てるようになり、友達と一緒にという安心感から自然と緊張や不安から解放され、楽しんでいる様子が多く見られたので、当番活動を充実させることでさらに、一人ひとりにフォーカスを当てて援助や支援を与えられるのではと考えた。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 毎日交代で二人一組のペアになって当番活動に取り組む。主に、朝の会や帰りの会でのお集まり時の挨拶係や給食時の号令係の実施。また、一日の感想を発表する。
- ② 一日の保育活動を通して保育者の簡単なお手伝いに取り組む。
- ③ 当番表の掲示や当番児用の名札を用意し、子ども達の当番活動に対する意識や取り組む様子から園生活に自発的な姿が生まれるように援助内容や環境構成を工夫しながら進めていく。

III 課題解決に向けた取組 （実践）

実践事例1 「泣かずに幼稚園に来たよ！」（10月～）

《幼児の実態》

当番活動にも慣れて子ども達も自分の番を楽しみに過ごすようになった頃、毎朝登園時に母子分離が難しく泣いてしまう子がいたが、泣かずに笑顔で登園できる日が定期的に出てきた。その日は、その子の当番日となっており張り切って登園する姿が見られる日となった。その子が当番活動に意欲的に取り組んでいる姿から、その子にとって当番活動とは自分自身を発揮できる場であると感じた。

《教師の願い》

本児が気持ちを切り替えるタイミングを自分で図ることが困難なので、本児にとって当番活動が幼稚園での楽しみの一つになってほしいと思う。また、当番日以外にも期待を持って登園できるように声かけを工夫し、援助の仕方を考えていきたい。

《環境構成》

当番表を掲示しているのので、誰がいつ当番に当たるのか見て分かるようになっている。また、順番も覚えているので、本児が「〇〇の次だから、もう少し！」という期待感が高まりやすくなっている。また、当番児は一日名札を付けて過ごすので、特別感も感じているようだ。

《教師の援助》

本児の登園時の不安に寄り添い、他のことに気を逸らせるような声かけを心がけた。当番日以外でも当番活動のことを伝えると喜ぶので、「今日は誰かな、〇〇の番はもう少しだね」などと会話を始め、「今日はこんなことをするよ。〇〇は何がしたい？」など、園生活に気持ちが向くように援助した。

《幼児の姿》

当番活動が好きな本児だが、毎日笑顔で登園できるわけではなく、泣いてしまう日の方が多い。しかし、今日は幼稚園で何をするのか聞くようになり、お家での出来事も積極的に話すようになった。次第に、泣いた後も自分で気持ちを落ち着かせてお仕度を済ませ、活動に参加できるようになっている。

《考察》

- ・当番活動が登園時の楽しみの一つとなっているため、登園時の母子分離の不安が解消されている。
- ・当番活動に自信を持って取り組んでいるので、園生活に楽しみが増えている。

実践事例2 「みんなの前で話せたよ！」（12月～）

《幼児の実態》

入園当初から人前で話すことや保育者に気持ちを伝えることが苦手な子がいる。本児の声を聞くこともやっとな毎日であり、本児の気持ちに寄り添い本児が安心する方法を模索しながら過ごしてきた。そのような中、少しずつ友達とは会話が見られるようになってきた頃、本児が朝の会で日付や曜日、天気を発表したいと手を挙げた日があった。毎日、手を挙げてくれた子の中から発表児を選んでおり、前で発表する友達を見て本児もやってみたくなくなったのではないかと感じた。実際に本児にやってみようと、はっきりとした声で発表をすることが出来た。初めて本児から言葉を聞くことができ、この日を境に本児が気持ちを言葉で表現できる場面が増えた。12月の本児の誕生会では、「名前・何歳・好きな食べ物や動物、色」を答え、本児がクラスで安心感を持って過ごすことが出来ていると感じた。

《教師の願い》

本児が伝えたいことを上手く言葉にできない不安感やもどかしさを受け止めたい。今回は、当番活動がきっかけだったが、今後も本児らしさを表現できる場を提供していきたいと思う。

《環境構成》

友達と一緒に言葉が出やすい本児である。保育者と一対一だと緊張してしまうので、友達の力を借りながら、クラスで安心して過ごせるように周りの環境を整えた。

《教師の援助》

気持ちを伝えることが苦手な本児なので無理に会話を広げるのではなく、本児が当番活動で発言した言葉を拾うように心がけた。また、本児が話しやすいように選択肢を与え、肯定的な関わりを持った。

《幼児の姿》

クラスの中で言葉を発する機会ができたことで、笑顔が増えた。また、本児がしたいことを訴えるようになっている。当番として前に立つ時には、みんなに聞こえる位の声も出るようになった。

《考察》

- ・本児にとって、当番活動で発する言葉は不安なく伝えることが出来る。また、友達や保育者が聞いてくれる環境を楽しんでいる様子がある。
- ・友達と一緒に取り組む安心感から、当番活動を楽しむことで自然と言葉が出ている。

IV 実践の振り返り

- ・今回、当番活動に力を入れて取り組んでみて、人前に立つことやみんなのために何かをすることを楽しむ子が多く、クラスの中で自分の価値を感じ、お互いに認め合う姿が増えたと思う。
- ・実践事例にもあるように、当番活動を通して自分のことを発揮したり自信を持ったりする園児を見て、自己肯定感の向上に繋がったと感じる。
- ・初めは、決められた当番活動内容だったが、次第に保育者の仕事内容にも興味を持ち、自分たちでやりたいことやできることを見つけていた。おたより帳を配ったり、事務所へのおつかいに行ったり、給食時に使う布巾とバケツの片付けをしてくれたり、保育者の用意した環境構成を超えて予想以上に自発的な姿や行動が見られた。
- ・自分のこと以外にも身の回りの友達のことにも気を配る子が出てきて、間違いを教えてくれたり、失敗を助けてくれたりと、保育者の普段の声かけや促しをよく観察しており、自分が先生になりきることを楽しんでいる。

V 今後の実践に向けて

- ・今回取り組んだ当番活動を通じた援助や環境の工夫はクラス内に留まっているので、今後はクラスから園内に発展させ、もっと広い場所での活動に活かせることができたらと感じた。例えば、園で飼育している魚の世話（エサやりなど）や園庭や園舎前の掃除（葉っぱ拾いなど）、花壇への水やりなど。
- ・3歳児ということもあり、保育者がある程度決めたペア同士で順番よく当番活動を取り組んだが、子ども達の実態や発達段階に合わせて、子ども自身が当番のグループを決めたり、当番内容を考えたりと変化させていきたい。
- ・当番活動をとっても楽しんでいる子ども達。友達の姿を見ることはあっても、自分自身の姿を見ることはできないので、当番活動の様子を写真に収めてクラスに掲示してみようと思う。自分の楽しんでいる姿や頑張っている姿を見て、園生活の中でさらに自発的な姿を期待したい。

〈主な参考文献〉

- 内閣府文部科学省厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- 三谷宏治 2016 『お手伝い至上主義！「自分で決めてできる」子どもが育つ』 プレジデント社
- 佐伯胖 2023 『子どもの遊びを考える「いいこと思いついた！」から見えてくること』 北大路書房

幼児理解に基づいた保育の実践

—遊びの発達段階の捉えを通して—

那覇市立真嘉比こども園 保育教諭 古波津 いのり

I テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説には「園児が主体的に環境と関わり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達と捉え、園児一人一人の発達の特性を理解し、その特性や園児が抱えている発達の課題に応じた指導を行うことが大切である。」とある。また、無藤（2018）は園児一人ひとりが「何に興味をもち」「どのような経験をし」「なにを感じているか」など保育教諭が多様な視点でとらえ続けることが大切だとし、保育教諭の幼児理解によって、環境構成や援助が適切なものになることから「幼児理解が保育の出発点となる」と述べている。

本学級5歳児（2年保育）男児13名、女児16名（内進級児13名）が在籍している。園児一人一人の家庭環境や生活経験の違いから、園児一人一人の人や物事への関わり方が大きく異なっていると感じている。

今まで0～5歳と様々な年齢や発達の園児の保育をする経験をしてきた。その中で感覚的な遊びから協同的な遊びなど、遊びの中に見出す楽しみが年齢に応じて変化する事を感じ、乳幼児期の遊びの捉えを整理し理解することで、園児理解を深められないかと考えた。

そして、幼児の遊びの発達段階を丁寧に捉える事で、園児が協同的な遊びの中で、思いを伝えあったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう経験につながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 子どもの発達段階と遊びの分類について文献の研究から理解を深める

(1) ピアジェ

- ・機能的遊び：感覚刺激や身体運動が目的となる遊び（～2歳）
- ・象徴的遊び：言葉など象徴機能が発達することでイメージの世界を楽しむ遊び（模倣、見立て、ごっこ、空想などを伴う遊び）
- ・ルールのある遊び：ルールを守ることで自己中心性から他者との公平な関係を目指し情緒をコントロールすることを覚えていく。
- ・構造的な遊び：精度の高い模倣を目指し本物に近い模型作りを楽しむような遊び

(2) バーデン

- ・何もしていない行動：じっとしていたり見回ったり歩き回ったりしている（2.3歳以前）
- ・一人遊び：一人だけの遊び。探索遊び。
- ・傍観的行動：他の子どもの遊びに興味があるが様子を眺めているだけの状況
- ・並行的遊び：数人の幼児が同じ場所で遊んでいるが交流はない（2～3歳）
- ・連合遊び：おもちゃなどのやりとりをして集団で共通の活動をしているが、意味や役割の共有はなく組織化されていない。
- ・協同遊び：目的のために組織を作って遊び、目的やルールに沿って遊ぶ（3～4以上）

(3) 田中真介・操作的遊び・構造的遊び・造形的遊び・役割遊び・運動遊び・知的認知遊びなど

2 文献研究の視点から保育記録より園児の実態を捉える協同遊びへの実践

- ・園児の観察記録や実態から、ピアジェ、バーデンの遊びの分類の視点から発達を捉え、そこから保育教諭の願いに基づいた環境構成、援助を行っていく。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

1 実践事例1：おまつりごっこ（7月）

《園児の姿》6月に入り、保育教諭や友達との安定した関係を基盤に、様々な素材に触れながら作ったり、作ったものを介して友達との関わりの広がりを楽しんだりする姿が見られる。各々の園児の発達を捉え、遊びのどこに楽しさを感じているのかを理解し、発達に応じた援助を行うことで、5歳2期の協同的な遊びの経験を楽しむ姿が見られ始めている。

《保育教諭の願い》各々が感じている遊びの楽しさを保障しつつ、お祭りごっこの共通のイメージのもと部分的なつながりを互いに感じながら遊びを楽しんでほしい。この方向性をもとに指導計画を作成した。

《実践1における抽出児の捉えと変容》

対象児	園児の姿	発達の捉え	環境構成と援助の視点	園児の変容と保育教諭の見取り
A	画用紙や廃材を使ってのアイス作り、アイスをままと使って楽しんでいる 	象徴的遊び・協同遊びを楽しむ段階	様々な素材を準備し自分のイメージを形にできるようにする。アイス屋を通して友達と意思を出し合いながら遊べるような場づくりの援助をする。	本物らしく作ったアイスを売ったり、アイス友達と食べたりしてやりとりを楽しむ。様々な素材に触れて製作を楽しみ、表現の幅が広がった。作ったアイス友達と食べたり、他のお店とのやりとりを楽しんだり、友達と意思を言葉に出しながら遊びを進めることを楽しむことができた。
B	色水を作ったり、色水をジュースに見立て友達にあげたりする事を楽しんでいる。 	連合遊びを楽しむ段階	色水作りを繰り返し楽しめるような環境構成とジュース屋さんを通して友達とつながる経験ができるような援助をする。	色水を繰り返し作ったり、作ったジュースをお店に並べたりすることを楽しんだ。色水作りを繰り返し楽しむことができている。ジュースを売っている園児との言葉のやりとりは少ないが、ジュース屋さんの共通のイメージの中で動くことを楽しむようになってきた。
C	太鼓の達人をイメージして太鼓を叩くことを楽しんでいる 	象徴的遊び・平行遊びを楽しむ段階	太鼓やバチを作ったり、お祭りの太鼓をたたく中でお祭りごっこのつながりを感じられるようにする。	自分で太鼓を作ったり、作った太鼓でお祭りの曲に合わせて太鼓をたたくことを楽しんだ。太鼓やバチを作ったりして遊びに必要なものを自分で作る楽しさを経験できた。お祭りの太鼓をお客さんに見てもらおうことを喜んだりお祭りのイメージを介して友達とのつながりを楽しむ姿がみられた。

《評価・反省》

- ・お祭りごっこの中で、個々の発達に応じた経験を重ねていくことができたと思われる。
- ・友達との共通のイメージの中で一緒に動くことを楽しめるようになってきたが、自分の思いを言葉にしたり、やり取りの中で遊びを深めたり、自分たちで方向性を作っていくことがまだ難しい。遊びの経験を重ねながら、より思いを伝えあいイメージを広げながら遊べるように援助をしていくことが大切である。

2 実践事例2 発表会に向けて活動（11月）

《園児の姿》様々な遊びを経験する中で、自分で遊びを選んで取り組んだり、遊びを介して友達と継続して楽しんだりする姿がみられるようになってきた。運動遊びでは、好きな遊びを選んで自分なりに挑戦したり、友達と継続して取り組む事を楽しんだりする姿が見られている。

《保育教諭の願い》学級で創作劇の共通のイメージは持ちながら、少人数のグループの中で、友達と意思を出し合い、遊びを継続して作り上げる楽しさを経験してほしい。今まで経験した遊びを繋げながら、共通のイメージの中で動く楽しさを感じてほしい。

《環境構成の視点》今まで経験した遊びの役（忍者やおばけ、エイサー隊など）になって、自分たちで

作ったストーリーの中で普段楽しんでいる運動遊びや手品などができるよう援助、環境構成を行っていく。

《実践2における抽出児の捉えと変容》

対象児	園児の姿	発達の捉え	環境構成と援助の視点	園児の変容と保育教諭の見取り
A	おばけと忍者のお話を友達と取り組み、ペープサートで楽しんでいる。また劇のイメージをもちながらお化けになって踊ったり、フラフープで特技を発表したりすることを楽しんでいる。	協同的な遊び 構成的な遊び を楽しむ段階 	園児のアイデアを創作劇に活かしながら、思いが形になる楽しさを味わえるようにする。友達と意見が違ふ時は折り合いを付けながら一緒に劇を作る楽しさを感じられるように援助する。	劇のストーリーを考えたり、自分のアイデアが友達に共有されることを楽しむ姿が見られた。いざこざもあるが、保育教諭の仲介の中で互いに折り合せて劇を形にする楽しさを感じている。
B	やっどこに意欲的に取り組み、友達とやっどこで蛇ジャンケンをしたり、ルールの中で一緒に遊ぶ楽しさを感じている。	協同的な遊び を楽しむ始めた段階 	劇の中で友達とやっこの技を発表する場を作る。劇のイメージの中で学級の友達と動く楽しさを感じられるようにする。	やっどこを友達と発表する事を楽しんでいる。自分からアイデアを出す姿はあまり見られないが友達と動いたり発表したりすることを楽しむ事ができた。
C	フラフープに興味を持ち、繰り返し取り組み出来るようになることを楽しんでいる。	連合遊びを楽しむ段階 	劇の中で友達とフープの技を発表する場を作る。劇の中で友達と同じ動きを楽しめるようにする。	フープを発表することで自信に繋がった。おばけになって友達と一緒に動くことを楽しむことができた。

《評価・反省》

- ・創作劇のストーリーを園児と形にし、園児の遊びから発表に繋げたことで、それぞれが意欲的に学級の友達と共通のイメージの中で動く楽しさを経験することができた。
- ・年長の後半に近づき、入園、園児の姿が大きく変容している。個々の発達の捉えを丁寧に行っていく事が大切だと感じた。園児の思いを汲みながら思いを形にしていく難しさを改めて感じ、教材研究を日々重ねていきたいと思う。

IV 実践の振り返り

一人ひとりが遊びのどこに楽しさを感じているのか捉え、バーデンやピアジェの園児の発達を理解する視点をいくつか持ちながら園児の理解に努めた。今の遊びを十分に楽しむ環境を保障すること、園児の発達の道筋の見通しを持ちながら、発達の課題にあった環境構成や発達への援助をすることが大切であると感じた。

V 今後の実践に向けて

- 1 一人ひとりの園児が遊びの中で経験している楽しさや感情をより丁寧にとらえることが保育の質の向上につながると感じた。園児の気持ちや感性を細かく捉えるために、発達の理解のための学びを深め、保育教諭の感性も磨きながら実践を重ねていきたい。
- 2 30名の学級で本園で1年保育の園児が半数の中、個々の発達を捉え主体的な生活や遊びを経験できるように限られた時間の中で環境構成、援助していくことの難しさを改めて感じた。こども園になり、担任を持つ年齢も幅広くなっている中で、保育を記録し保育技術をしっかりと重ねていくことが大切だと感じ、誠実に実践していきたい。

〈主な参考文献〉

『幼稚園教育要領解説』	文部科学省	フレーベル館	2018
『育てたい子どもの姿とこれからの保育』	無藤 隆	ぎょうせい	2018
『乳幼児の保育・教育』	岡崎友典・梅澤 実	放送大学教育振興会	2020

自分の思いを言葉で表現し、互いの思いに気付いて、 一緒に楽しく遊びに取り組める環境や援助の工夫 —保育教諭や友達との関わりを通して—

那覇市立天妃こども園 保育教諭 宮里 秀史

I テーマ設定の理由

近年のデジタル化やSNSの発達により、インターネット等を通して、興味のあることへの情報がより手軽に得られる状況になり、家庭や地域における子ども達の遊びは変化している。実体験を通して直接得られる経験は減り、社会状況の変化から身近な人との関わりを持って会話を楽しむ機会も減少し、自身の感情や思いを伝える言語の獲得が難しくなっている。

教育・保育要領の領域「人間関係」の内容(6)では、「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」また、内容の取扱い(4)では、「道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、園児が他の園児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。(中略)」とある。

本学級は4歳児(3年保育)、男児15名、女児8名の計23名が在籍している。学級の実態として、年度当初は新しい環境へ戸惑いや不安を見せる様子も多く見られ、登園時や生活、遊び、活動の合間に泣き出してしまふ子の姿も見られた。次第に園生活に慣れてきている様子が見られるものの、園児の中にはまだ不安な様子が見られる子もいる。また、自分の気持ちを言葉で表現することが出来ないもどかしさから、保育室を飛び出してしまったり、友達とトラブルになったりする姿も多く見られる。

これらの学級の実態を基に本研究について、思いや考えを自分なりの言葉で表現し、分かり合う喜びを味わえるようになるためには、保育教諭はどのような援助ができるのか、一人一人の心、子ども達同士のつながりを深めていくためにはどのような環境構成の工夫が必要かを考えていきたいと思い、本テーマを設定した。

II 研究内容

- 1 園児の実態に合わせた環境構成
 - ・自分の好きな遊びを通して思いや考えを言葉で伝え合い、互いの思いに触れる体験が味わえるようにする。
- 2 友達や保育教諭に思いを伝えたいくなる場の構成
 - ・園児一人一人の思いに共感しながら、信頼関係を築いていく。
 - ・「話してみたい」「聞いてみたい」という場の設定や雰囲気作りを工夫していく。
- 3 絵本の様々なお話を通して、新しい言葉や表現に触れ、感覚を豊かにする援助
 - ・季節、行事に関連した作品や、園児の実態に合わせた絵本の選定を工夫する。

III 課題解決に向けた取組(実践)

○実践事例1(絵本や歌を通じた取り組みの中で)

〈園児の姿〉

園生活にも慣れてきた6月上旬、友達との関わりも増え遊びが深まる中で、遊具の扱いや貸し借り、順番等を巡って自分の思いをうまく言葉で表現できず、トラブルになってしまう姿が多く見られた。慰霊の日を前に、絵本「へいわとせんそう」の読み聞かせをすると、お父さんが戦争に行くシーンでは「どうして鉄砲を持っているの？」や、敵、味方という表現を交えた赤ちゃんが出てくるシーンでは「皆一緒だよ」と子ども達なりの疑問や考えを話す姿が見られた。

【保育教諭の願い】

- ・学級や園での集会を通して、友達と関わる時にはどのような関わりが嬉しいかを考える機会になってほしい。
- ・絵本の読み聞かせや歌を通して、優しい気持ちになったり、友達の思いや良い所を感じたりできるようになってほしい。

〈保育教諭の援助〉

- ・絵本の読み聞かせを通して、園児が感じたことを受け止め、感じたことや考えたことを、学級全体で共有する時間を設ける。
- ・友達と一緒に活動し、時間を共有する中で、友達と関わる楽しさや心を通わせる嬉しさを感じられるよう、手話ソング「はなさきやま」を取り入れる。

- ・友達の感じたことに触れることで、同じように感じたり、違う考えを持っていることに気付いたりできるよう、発表した子の声を全体にも聞いてみる等、言葉掛けを工夫する。
- ・物語の登場人物の優しさや行動について考えたり、言葉、表現に触れたりして、園児自身の友達との関わりや自分の思いを伝えるための言葉が考えられる作品を選定する。

〈環境構成〉

- ・園児が手話ソングを通して互いの心を通わせ、友達と一緒に楽しめるよう音源を用意し、扱いやすいようにする。
- ・保育教諭の読み聞かせの後、園児が自分で作品を見てイメージを膨らませたり、考えを深めたりできるように、手に取りやすい所に配置する。

〈園児の変容〉

- ・手話ソングと同じ題名の絵本があることに気付き、学級で読み聞かせをした。その後、学級の集会でやっている一日の振り返りの中で、「三輪車に乗るのが難しかったけど、頑張りました」と発表した友達に対し、絵本の中に出てくる言葉を使って「我慢の花が咲いてるんじゃない」「優しい花が咲いてるかも」と絵本と関連付けた声で励ますと共に、友達の話に関心を持ってよく聞いてみようとする姿が見られるようになった。
- ・「仲間に入れて」「一緒に遊ぼう」等友達との遊びに必要な言葉を、保育教諭の援助も借りながら自ら声をかけて遊びに加わったり、思いを伝えたりしようとする姿が見られるようになった。

〈結果と考察〉

- ・絵本と関わりのある歌、絵本を通して「優しい」「我慢」という言葉に触れ、友達との関わりや自身の行動を振り返ることができたのではないかと考える。
- ・学級全体で友達に認められる経験やその雰囲気共有できたことで、友達への関心が高まり、友達の良さに気付く姿につながったのではないかと考える。

○実践事例2（旗頭を作りたい）

〈園児の姿〉

10月中旬的那覇大綱引きに参加したり、見に行ったりして地域の文化に触れた子が多く、保育教諭へ参加したことを嬉しそうに伝える中で「旗頭があったよ」「いくつもあったよ」と旗頭へ関心を持っている声が多く聞かれた。また、きょうだい那覇市の旗頭フェスタに参加したという子もいて、旗頭への関心が非常に高まっていた。自分で見た経験を絵に描いて楽しむ姿が見られ、友達と一緒に「自分達でも旗頭を作ってみよう」という声が出てきた。

【保育教諭の願い】

- ・自分の感じたことや考えたことを表現する楽しさを味わってほしい。
- ・友達と思いや考えを伝え合い、イメージを共有して取り組む楽しさを味わって欲しい。

〈保育教諭の援助〉

- ・地域の文化を取り上げ、園児の経験を学級全体で共有できるように、大綱引きの話や旗頭について話をし、思ったことを伝え合う時間を設ける。
- ・年長児の学級でも旗頭作りが盛り上がっていることを伝えたり、年長児の作っている旗頭の様子を学級の集会で紹介したり、皆で楽しんで取り組めるよう共有する時間を設ける。
- ・園児の言葉に共感し、思いが実現できる経験を重ねていくことで自信を持って取り組めるよう援助を行う。
- ・遊びの続きが翌日もできるように置き場所を設定したり、作り方や動き、揚げ方を試行錯誤してじっくりと取り組めるよう時間を保障する。

〈環境構成〉

- ・園児の興味関心が広げられるよう、旗頭の意味やどのような旗頭があるのか、写真やイラストを掲示する。
- ・園児自身の経験を振り返ったり、経験していない子でもイメージが持てるよう絵本「おおづなひきでちむどんどん」を繰り返し読み聞かせしたり、作る場所の近くで手に取りやすい場所に配置する。
- ・イメージが実現できるように、様々な素材を準備し、必要な物を友達と選んだり、園児自ら必要な物を言葉で伝えたりして、工夫して制作遊びを楽しめるように環境構成を行う。

〈園児の変容〉

- ・絵本や掲示物を通して地域の文化により関心を持ち、「旗頭のこの部分は○○って言うんだよ」と友達と伝え合ったり、「旗頭に葉っぱを付けた方がいいんじゃない」「絵本にも描いてあったよね」と互いのイメージを出し合って取り組む姿が見られるようになった。
- ・友達の取り組みを見て「仲間に入れて」「自分もやりたい」と、自ら関心を持って遊びに加わり、

楽しんで取り組む姿が見られるようになった。

- ・一緒に旗頭を作ったり揚げたりする中で、相手の考えを聞いたり、自分の思いを伝えたり、受け入れられたりしながら遊びを進める姿が多く見られるようになった。
- ・子ども達自ら「運動会でも旗頭をやりたい」という声があり、11月の運動会で披露することができ、園児一人一人の満足感につながった。

〈結果と考察〉

- ・地域の文化に関する絵本を活用したり掲示をしたりしたことで、イメージが膨らみ、必要な物を考えながら、園児の持つイメージが少しずつ出来上がる楽しさを味わうことができたと考え。
- ・友達の楽しんでいる様子や、自分の地域の文化に触れられる環境があったことで、自ら関心を持って遊びに加わる意欲につながったのではないかと考える。
- ・互いの思いや考えを伝え合うことでイメージを共有し、一緒に遊びを進める楽しさを味わうことができたと考え。
- ・子ども達一人一人が十分に遊びを楽しむことができていたことで自信につながり、周りの多くの人と楽しさを共有したいという意欲につながったのではないかと考える。



IV 実践の振り返り

1 成果

- 園児が互いの様子に気付き、興味を持って関わることができるよう遊びの場を構成し、援助を工夫したことで、友達の遊びに自ら関心を持って行動し、一緒に遊ぶ中で信頼関係が生まれ、互いの良さを感じながら関係を深めることができた。
- 園児の思いや考えに共感し、認めていきながら、自分の気持ちに合った言葉を保育教諭が伝えていく援助を積み重ねたことで、自分なりの言葉で相手に伝えようとする姿につながっている。
- 友達の良さを感じられるように学級での振り返りの場を設けたり、遊びの中で頑張っていることを紹介したりして伝えていくことで、一人一人の自信につなげることができた。また、友達の良さに気付き、認め合う経験を積み重ねたことが思いやりを持って接したり、困っている友達を助けたりする姿につながった。
- 日々の絵本の読み聞かせでは、季節や行事、学級の実態に合った作品を意識して選定を行った。絵本の中で表されている様々な感情や表現、言葉に触れることで、園児自身の友達との関わりや伝え方を振り返り、身に付けていくことにつながった。

2 課題

- 友達との関係が深まり、互いの良さを知り、認めているからこそ思いが行き違う様子も見られる。互いの思いを尊重し、自分達なりに折り合いが付けられるよう、一人一人の心に寄り添った丁寧な対応に努めたい。

V 今後の実践に向けて

今後の園生活や行事を通して、友達との関係をより深めて進級への期待を高めてほしいと願っている。園児の成長、それぞれの発達を丁寧に把握し、自信につながる経験、互いの良さを感じて気持ちを伝え合える経験を積み重ねられるよう、引き続き環境構成や援助の工夫を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

- 内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成30年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 フレーベル館
- 内閣府 文部科学省 厚生労働省 令和4年 『幼保連携型認定こども園における園児が心を寄せる環境の構成』 フレーベル館
- shizu 2013 『発達障害の子どもを伸ばす魔法の言葉かけ』 講談社

「一人一人が安心して過ごせる、 居心地の良い学級作りのための環境構成と援助の工夫」 —サークルタイムを用いて子どもと一緒に作る学級—

那覇市立大道みらいこども園 教諭 浦崎 祥代

I テーマ設定の理由

本学級は、4歳児クラス(6年保育)男児9名女児13名、計22名在籍しており、3名が新入園児であるが集団経験がある。クラスの実態としては、未満児クラスから入園している子も多く、園生活に慣れ、気の合う友だちと好きな遊びをする姿が見られている。しかし中には環境の変化に不安な様子を見せ、登園時に泣いたり保育教諭の傍から離れられなかったりする子の姿も見られる。一方で、絵本読み聞かせや手遊びなど好きな活動には喜んで参加するが、生活の中で集団行動をすることに意欲的になれなかったり、周囲に興味を示さなかったりする子の姿も見られる。また、クラスには特別な配慮を要する子が複数おり集団活動を苦手とする子も多く、発達や経験の差など個に応じた支援の工夫も必要である。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、「この時期においては…(中略)仲間と遊び、仲間の一人という自覚が生じ、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになる。これらの発達の特徴を踏まえて、この時期の教育及び保育においては、個の成長と集団としての活動の充実が図られるようにしなければならない。」と記されている。また解説においては「集団が園児一人一人にとって安心して十分に自己を発揮できる場になっていなければならない」「一人一人のよさや特徴が生かされた集団を形成するためには、まず保育教諭等が、園児の心に寄り添い、その園児のよさや特徴を認めることが大切である。」とある。

これらのことから、園児が学級を「居心地の良い場所」と感じ、安心して自己を発揮していく為には、保育教諭が園児一人一人の心に寄り添い、幼児の興味関心や実態に沿った適切な幼児理解のもと、園児と共に「居心地の良い学級」を作り上げていくものであらうと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 4歳児における「人間関係」についての捉え

要領解説において、「人と関わる力の基礎は、周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる」と示されている。4歳児は、自分以外の人や物への興味が広がり自意識が芽生えてくる。その他者との関わりの中で、人間関係の葛藤や保育教諭や友だちと共にいる楽しさや充実感を味わい、次第に皆と生活を作り出していく喜びを体験する時期でもある。園児は、信頼する保育者に受け入れられ見守られていると感じることで安心感を持ち、自分の力を発揮できる。園児が安心して園生活を過ごす事が出来るように援助することが必要である。

2 園児の興味関心を捉えるための実態把握と子ども理解

乳幼児期の生活は、子どもの興味関心に基づいた自発的な活動から成り立っている。しかし、乳幼児期は心身ともに個人差が大きい為、園児一人一人の発達の過程を踏まえた上で、教育及び保育を展開する必要がある。また、園児の発達する姿は、一人一人の生活経験、興味関心などによって異なっているため、保育教諭等は園児の実態を捉えた環境を構成し、園児一人一人の発達の特性を理解しながら発達に必要な経験が得られるよう、指導をしていかなければならない。なお、園児一人一人の発達の特性に応じた指導は、集団生活の中で、園児が互いに関わり合うことを通して発達が促されていくということを踏まえ、園児一人一人の特性を生かす集団作りへと教育及び保育を展開していくことが大切である。

3 一人一人の良さや特徴が生かされた「居心地の良い温かな集団」作り

要領には「園児一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。その際、集団の中で、幼児が自己を発揮し、保育教諭や他の幼児に認められる経験をし、自分の良さや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること」と示されている。温かな集団は互いを大切にし、心のつながりのある園児一人一人のよさが生かされた集団といえ、保育教諭が子どもの心に寄り添い子どもの良さを認めていくことが大切になる。保育教諭が園児一人一人の子どもを大切にする姿勢は、園児同士が互いを大切にする姿勢に繋がり、それがクラス全体の温かな関係を作り出すことになる。さらに、園児一人一人の育ちは、集団を高める事にもなるため保育教諭は子どもたちにとって安心して自己発揮できる、互いに育ちあう場になるように援助することが大切である。また、クラスや他職員間で情報を共有し合い、園全体で温かな雰囲気作りをしていくことも大切である。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

◆実践事例：ぱんだ会議で考えよう！

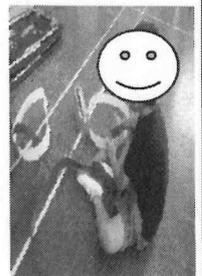
【クラス全体の実態】 4月～6月頃

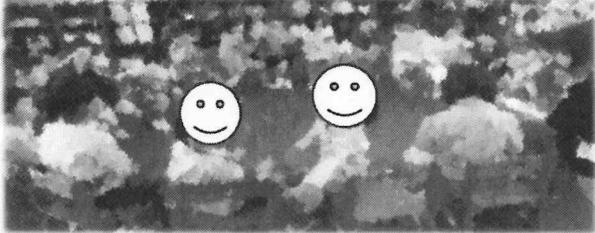
- ・新しい環境の変化に戸惑う様子が見られ、好きな遊びを見つけられなかったり、クラスの集まりなどに意欲的に参加出来なかったりするなど、全体的に落ち着かない様子が見られる。
- ・絵本読み聞かせなど興味を持った活動や遊びには、喜んで参加する姿が見られる。
- ・見通しの付かない初めての活動など、不安なことや興味関心を持ってない活動には一緒に参加しない子の姿も見られる。

【保育教諭の願い】

- ・新しい環境に慣れ、安定した生活の中で色々な活動に意欲的に取り組んで欲しい。
- ・クラスの友だちとの関わりを広げ、自信を持って活動に取り組んで欲しい。
- ・園児の思いや考えを言葉で沢山表現して欲しい。

	活動と園児の姿やつぶやき	○保育教諭の援助と ●環境構成の工夫	○学級の育ちつつある姿
7月	色水遊び 繰り返し遊びたいが、暑さ指数が高いため園庭遊びが難しい。 「もっとやりたいのに…」 「出したい色が上手く出せない…」	○色水遊びに継続して取り組めるように室内で続きをすることを提案し、園児のもっとやりたい！の思いに寄り添うようにする。 ○一緒に相談しながらルールを決めていき、園児と一緒に問題解決に向かうようにする。 ●ドキュメンテーションを張り出したり、サークルタイム『ぱんだ会議』の中で発表の機会を設けたりすることで、友だちの発見や感情に共感できるようにする。	○色の变化や水の感触を楽しむ姿から「どうしたら○○色になるかな?」「凍らせてみたい」「またやりたい」など繰り返し挑戦したり遊びが継続したりするようになった。 ○やりたいことを言葉で積極的に伝えられるようになった。 ○友だちとの関わりが広がり、物の貸し借りなどのやり取りがスムーズになったり「こぼさないように…」と周囲に目を向けたりする様子が見られるようになった。 ○初めは興味関心を持たなかった子ども、繰り返し色水遊びを楽しむようになり、上手く出来ない時には友だちを真似ながら納得がいくまで繰り返し挑戦する様子が見られた。サークルタイムの中でも、自分が作った色水を発表する子の様子が見られた。
10月	運動会 当初決まっていた玉入れに興味を示さず積極的に練習に参加しない子がいる。 「こんなのやりたかった！」	○「これはやりたくない」の思いも受け止めながらどうしたら良いのかを園児と一緒に考え、クラス全体が意欲的に行事に取り組めるように寄り添う。 ○『ぱんだ会議』を開き、園児の考えや思いを聞き、園児から出た『やりたい』3種目を競技に採用し、一人一人の良さや思いに沿った行事計画を進める。 ●体育館での運動会でも実現可能な競技内容を工夫し、道具の準備を行なう。	○繰り返し『ぱんだ会議』を行なうことで柔軟な考えが子どもたちから出てくるようになった。言葉での表現力も豊かになり、言葉での話し合いが深まるようになった。 ○自分たちで決めていった運動会に向けて、クラス全体のイメージが一つにまとまり、みんなで練習や準備を進めることが出来、達成感を一緒に味わうことが出来た。 ○初めは消極的だった子ども、自分が提案した競技も採用されたことで自分から練習や道具作りに意欲的に取り組む姿が見られた。またその後、他の活動にも興味関心を広げる姿が見られた。
12月	生活発表会 運動会からの流れでクラス全体が意欲的にぱんだ会議に参加し、「○○	○ぱんだ会議を繰り返し行ない、発表会でやりたい歌やダンスなどをみんなで決めていき、園児の思いに沿って行事を進めていけるように援助する。	○ぱんだ会議を通して決めていった内容や、自分で選んだチームの演目に自信を持って参加する姿が見られた。 ○発表会後のぱんだ会議では、「人がいっぱいでお家の人が探せなかったけど楽しかった。」 「高いところから家族三人が見えてドキドキし



<p>したい」と話し合いがスムーズに進んだ。</p> <p>当初あまり興味を示していなかった子も、好きな歌やダンスを選び参加してみようとする姿が見られた。</p>	<p>○どのチームに参加するかを自分で決められるようにし、意欲的に活動に取り組めるようにする。</p> <p>○園児一人一人の興味関心に合わせた内容を取り入れ、クラス全体で楽しく行事に取り組めるようにする。</p> <p>●発表会前後には、自由に衣装や道具を使って遊べるようにし、練習や発表会ごっこを友だちと一緒に楽しむようにする。</p>	<p>た」など、それぞれの言葉で感じたことを伝えるなど、言葉の表現力の育ちも見られた。</p> <p>○苦手意識を示していた子も、発表会後に「チームの歌とダンス全部が楽しかったです！」と発表する姿があり、発表会ごっこでも秋チームのダンスを繰り返し踊るなど、発表会の余韻まで十分に楽しむ姿が見られた。</p>
		

【考察】

- ・園児一人一人の発達過程や発達特性、興味関心など園児の実態を捉えた環境構成と援助を行なったことで、園児が安心感を持ち自信を持って自分の力を発揮していくことに繋がったと考える。
- ・サークルタイムを用いて園児の心に寄り添っていったことで、集団の中で互いに認め合える雰囲気が作られ一人一人の良さや特徴が生かされた『居心地の良い温かな集団』作りへと繋がったと考える。
- ・A児もクラス全体が一緒に行事に向かう雰囲気の中で、安心してありのままの自分の良さを発揮することが出来たと考える。

IV 実践の振り返り

① 成果

- ・園児一人一人の発達過程や生活経験、特性など個人差の大きい学級の中で、園児の興味関心や発達などの実態を捉えながら環境構成や保育の工夫に努め、園児と一緒に学級作りを進めていくことが出来たことで、園児一人一人が安心して自己発揮できる学級となった。
- ・サークルタイムを用いて、対話を通して園児の思いに寄り添い行事や日々の保育と一緒に向き合うことが出来た。園児同士が考えを言葉で伝え合うことで、相手の思いや考えにも耳を傾けようとする姿が見られるようになった。また言葉の表現力も豊かになり、感情や思いを積極的に自分の言葉で伝えようとする姿が見られるようになった。

② 課題

- ・「子どもと一緒に作る学級」は、担任間や特別支援ヘルパーとの連携を密にし、今後もねらいや思いなどを共有し、チームで保育を進めていく必要がある。
- ・生活経験や発達の特性など、個人差の大きい学級の中で一人一人の園児の良さを引き出すために、より深い幼児理解や適切な保育の工夫が必要である。

③ 実践を通じた自身の気づき、考えなど

- ・園児一人一人が安心して過ごせる居心地の良い学級作りをするには、保育教諭が園児との信頼関係を築きながらそれぞれの興味関心や思いを深く読み取る幼児理解が大切であると学んだ。さらに、個の幼児理解を図った上で、対話を通して保育教諭の計画的な保育のねらいや思いと、園児一人一人の思いを共主体で進めていくことで、園児が互いに自己を発揮し合える居心地の良い集団作りが行えると考える。

V 今後の実践に向けて

- ・今後も園児のありのままの姿を学級の実態と捉え、園児一人一人の発達や思いに寄り添いながら、柔軟な保育計画の作成や環境構成の工夫に取り組み、園児が居心地の良い学級の中で自己を充分に発揮していくことが出来るように、より細やかな援助を実践していきたい。

〈主な参考文献〉

- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 平成30年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』～フレーベル館～
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 令和4年『園児が心を寄せる環境の構成』～フレーベル館～
- ・大豆生田啓友・おおわだけいこ『子どもが中心の「共主体」の保育へ』～小学館～
- ・大豆生田啓友・豪田トモ『子どもが対話する保育「サークルタイムのすすめ」』～小学館～

「幼児が安心して園生活を送る中で、言葉を豊かにするための 環境構成と援助の工夫」

—幼児理解と環境構成の工夫を通して—

豊見城市立上田こども園 教諭 氏名 上間 綾音

I テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説「健康」の内容(1)の中で、「園児は周囲の大人から受け止められ、見守られているという安心感を得ると、活動の意欲が高まり、行動範囲も広がっていく」とある。また、「言葉」の領域によると、「園児は園生活の中で心を動かされる体験を通して、様々な思いをもつ。この思いが高まると園児は、その気持ちを思わず口に出したり、親しい相手に気持ちを伝え、共感してもらおうと喜びを感じるようになる。このような体験を通じて、自分の気持ちを表現する楽しさを味わうことが大切」とある。

本学級は、3歳児（3年保育）19名で、全員新入園児である。入園当初は初めての園生活への不安から、泣いて登園する子が多かった。また、名前を呼んでも返事ができなかったり、集まりの呼びかけをしても遊びに夢中で聞いていなかったり、言葉よりも先に手がでてしまうこともある。そのため、表現遊びや視覚的教材、個々の幼児理解を深め内面理解、個々にあった声かけの工夫で幼児が楽しく身近な人と関わり、安心して園生活を送り、言葉を豊かに表現できるのではないかと考え本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ①安心して園生活が送れるような保育教諭との関わり方と展開の工夫
- ②言葉が広がるような環境構成と幼児理解に基づいた理論研究
- ③保育実践と振り返り

III 課題解決に向けた取組（実践）

1 実践事例 「みんなと一緒だと嬉しいね」 4月～5月

【幼児の実態】

- ・新しい環境や、初めての集団に戸惑う子、登園時や活動の途中で保護者のことを思いだし泣く子等不安定な姿が見られた。

【保育教諭の願い】

- ・保育教諭や友達に親しみを持ってほしい。
- ・新しい環境に慣れ、みんなと安心して園生活を送れるようになってほしい。

【◇保育教諭の援助】

- ◇遊びを行う際は、一人でじっくりと遊んだり、ごっこ遊びや見立て遊び等、好きな遊びを取り入れ、十分に遊べるようにし、時間に余裕をもって行動する。
- ◇日々の保育日誌に個々の実態を記録し、担任間で共有したうえで、一緒に遊びに入ったり、寄り添い、抱きしめる等安心して過ごせるようにする。
- ◇リズム遊びや体操を取り入れ、保育教諭や友達と一緒に同じ空間で安心して遊べるようする。

【◆環境構成】

(1) 親しみが持てる環境

- ◆登園時、音楽をかけ楽しい雰囲気的环境を作る。

(2) ドキュメンテーションを活用した保育の工夫

- ◆遊びや生活の様子を掲示し、家庭へ発信して共有する。



【幼児の変容】

- ・登園時まだ泣く子はいるが、切り替えが早くなり、笑顔で登園する子が増えていった。
- ・ドキュメンテーションをクラス内や園全体の掲示板に掲示したことで、登降園時に子ども達が保護者に教える姿が見られるようになった。

【考察】

- ・担任間で日誌や日々のカンファレンスを通し、共通理解を図ったことで、統一した対応を行えた。そのことで、安心・安定して園生活が行えるようになっていったと考える。また、時間に余裕を持たせることで、個別対応も丁寧に行え、全体的に安定し、「〇〇遊び楽しかったね」「またやりたい!」と充実感や満足感・意欲にも繋がったと考える。
- ・ドキュメンテーションを通し、園生活の様子を掲示したことで、保護者と子どもとの会話のきっかけになったと考える。

2 実践事例 「見て・触って・音を聴いて」6月～9月

【幼児の実態】

- ・大雨や雷の音に「キャー」と言い、保育者にしがみついてくる姿が見られた。
- ・スイカ割りでスイカを食べたり、様々な形や色の氷や色水に触れて遊んでいる。



【保育教諭の願い】

- ・身近な自然事象や身の回りの物に興味・関心を持ってほしい。
- ・自分の感じたこと、気づいたことを言葉で表現する楽しさを感じてほしい。

【◇保育教諭の援助】

- ◇感じたこと・気づいたことを言葉で伝えられる場を設ける。
- ◇季節に合わせた絵本を読み、子ども達のイメージが湧きやすいようにする。

【◆環境構成】

(1) 保育の展開の工夫

- ◆雨、雷、氷、スイカ、色水等、自然事象や身の回りの物をピックアップする。(直接体験)
- ◆見たり・聴いたり・触れたり、食べてみる機会を設け「音・触感・色や形・香り・味」等、五感を味わえるよう環境を整える。(感覚を表現)

(2) ドキュメンテーションを活用した保育の工夫

- ◆子ども達の気づきを、書き出し掲示する。 →



【幼児の変容】

- ・全員で実際に触れ、音を聴いてみたり、食べたことで「ポツポツ」「ゴロゴロ」と擬音語がでけたり、「冷たい」「赤い」等と様々な言葉が飛び交った。また、上手く言葉にできない子たちも、友達を真似して発言する姿も見られた。

【考察】

- ・様々な体験をしたことで、言葉の表現へと繋がったと考える。
- ・ドキュメンテーションで掲示したことで様々な言葉がわかり、クラス全体でも共有できたと考える。

3 実践事例 「♪どんぐりころころ どんぶりこ〜♪」11月

【幼児の実態】

- ・飾った、どんぐり・くり・まつぼっくり等の秋の自然物を見たり、触れたりして興味を持っている子ども達。

【保育教諭の願い】

- ・秋の自然物に触れ親しみ、様々な感覚を味わい言葉で表現してほしい。
- ・友達と一緒に楽しみながら遊べるようになってほしい。

【◇保育教諭の援助】

- ◇子ども達の気づきに共感したり、言葉にして表現する楽しさを味わえるようにする。
- ◇園庭で見つかったり、家庭から持ってきてくれた自然物をクラス全体でも共有する。

【◆環境構成】

(1)自然物に親しみ・遊べる環境

- ◆壁に「ドングリ転がし」を設置。
- ◆他の自然物にも興味が持てるように、自然物を入れられる「お散歩バック」を用意する。

(2)言葉を育む環境

- ◆歌詞を掲示して、遊びながら歌に親しめるようにする。
- ◆子ども達の感じたこと気づいたことに共感し、様々な音や臭い、色、形を掲示する。

(3)繰り返し遊べる環境

- ◆廊下にコーナーを作り、子ども達が様々な形や大きさの自然物がいつでも触れられるように環境を整える。



【幼児の変容】

- ・転がる面白さ、落ちる楽しさを味わっており、どこに落ちてくるかを予想しながらカップを置き、入ると「入った」と喜ぶ姿が見られた。入れ替わり遊び、歌詞を掲示することで「どんぐりころころ～」と口ずさむ姿も見られた。
- ・手のひらに乗せたり、上下に振る、匂いを嗅いでみる等、友達と一緒に遊ぶことで友達関係も深まりつつある。

【考察】

- ・廊下に設置したことで登降園の際、親子で興味を持って触れ合える時間になった。また、子どもが家庭から持ってきた「ハウオウボク」を飾ったことで“形”“音”“匂い”等の新たな感覚に触れることができた。クラス全体で取り上げたことで、更に興味が湧き、気づいたこと・感じたことを言葉で表現できるようになったと考える。
- ・歌詞を掲示したことで、友達と歌いながら遊び、自然物が手に取りやすいに場所にあった為、他の自然物にも興味を示し、試しながらドングリ転がしを楽しむことができたと考える。

IV 実践の振り返り

《成果》

- 3歳児は、保育教諭との信頼関係を築き安心感を得られると「聞いて聞いて」と話しかけてくれたり、手遊びや歌・ダンス等で興味を引くことで次第に活動の意欲が高まり、興味・関心が広がっていくことがわかった。
- 言葉遊びや“五感”を意識し音の面白さや、感覚が味わえる環境を整えたり、イメージが膨らむよう、絵本の読み聞かせをする等、様々な形で言葉を育める環境構成を行ったことで言葉での表現が広がった。
- 様々な形でドキュメンテーションを発信していったことで、会話のきっかけになった。
- 友達と同じ空間で一緒に遊びを共有し、同じ思いを共感しあうことで、友達関係も深まりつつある。

《課題》

- ・ドキュメンテーションを掲示するにあたり、活動から時間が経つと時差があるので、内容に計画を持って発行・掲示のタイミングの工夫が必要だった。
- ・友達関係は深まってきたが、意見の食い違いからトラブルになることもある。

V 今後の実践に向けて

- ・担任間で連携し、行事や伝えたいことは前もって話し合い、計画を持ってドキュメンテーションを活用しながら発信し、会話のきっかけづくりの手助けをしていく。
- ・お互いの意見に寄り添い、仲立ちすることで言葉で伝えられるよう援助を行っていく。

〈主な参考文献〉

- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 平成30年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
大豆生田 啓友・おおえだ けいこ 平成20年 『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』 小学館
深見公子 平成25年 『イラストでよくわかる0～6歳児の発達と保育』 成美堂出版

自分の思いを言葉で表現し、伝える喜びが味わえる保育の展開

—幼児理解と環境構成の工夫を通して—

豊見城市立上田こども園 保育教諭 与那覇 伊代

I テーマ設定の理由

本学級は4歳児（3年保育）計20名。進級児が多く、保育教諭や気の合う友達と好きな遊びや慣れ親しんだ遊びを楽しむ姿がある。一方、自分の思い通りにことが進まない、思いが上手く伝えられずに、強い口調で言葉をぶついたり、思いのままに物に当たったりしてしまう姿も見られる。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の「言葉」の領域 1ねらいにも（1）自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう（2）人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わうとあり、幼児期において言葉で自分の気持ちを表現し、伝え合う喜びを味わうことは重要視されている。そこで、保育教諭や友達と言葉のやりとりを楽しんだり、友達と発見や喜びを共感し合ったりすることを通して、自分の思いを言葉で表現する楽しさや伝わる喜びを味わってほしいと考え、本テーマを設定した。その手立てとして、幼児理解を目指し、必要な環境を整えることに視点を置き、研究を進めていく。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 幼児理解に基づいた環境構成と教師の援助の工夫
- 2 ドキュメンテーションを活用した保育の工夫
- 3 幼児の読み取りのための保育カンファレンスと記録
- 4 幼児の主体的な遊びを中心とした保育の展開

III 課題解決に向けた取組（実践）

1 実践事例「見つけた！オオゴマダラの卵！」（5月）

【幼児の実態】

園庭で虫を探ることや捕まえることを楽しんでいる。見つけた虫を保育教諭に知らせたり、友達と観察したりする姿が見られる。

【保育教諭の願い】

- ・自分の思いや考えを言葉にして伝える楽しさや伝わる喜びを味わってほしい
- ・自分の考えや発見を保育教諭や友達と伝え合う喜びを味わってほしい

【環境構成】

- (1) 保育教諭や友達、保護者と言葉の伝え合えるドキュメンテーションの活用
 - ・子どもたちが園庭で見つけた生き物を写真に撮り、写真を増やしていきながら“みつけた図鑑”（記録のドキュメンテーション）を作成して掲示する。
 - ・身近な生き物に関心を持って関わられるように、子どもたちと成長を追いながら、変態するごとに写真で掲示していく。
 - ・活動を振り返ったり、思いや考えを伝え合ったりできるように新聞型ドキュメンテーションを作成して、ファイルにしていく。
- (2) 継続的に観察できるコーナーの設置
 - ・保育教諭や友達と気付きを伝え合ったり、観察したりできるように子ども達と一緒に観察しやすい虫かごの検討やコーナーづくりをしていく。



“みつけた図鑑”を見る子どもたち



記録型ドキュメンテーション

【保育教諭の援助】

- ・担任間で子どもたちの気付きや発見を共有できるように、週案の裏に個別の記録を記入し、カンファレンスをしながらか、幼児の経験や育ちを読み取ったり、必要な環境や手立てを検討したりしていく。
- ・子どもたちの気持ちに寄り添い、気付きに共感したり、仲立ちとなったりしながら自分の思いを伝える機会や伝わる経験が重ねられるようにする。

【幼児の変容】

モンシロチョウを飼育したことをきっかけに、オオゴマダラ、カバマダラ、オタマジヤクシもクラスで飼育することになった。虫に関心がなかった子も「触れるようになったよ」「赤ちゃん、可愛いね」と言いながら、触れ合う姿が見られるようになってきた。ドキュメンテーションを通して、子どもたちがつながり、友達と体験を思い起こし、言葉でやりとりするようになっていった。また、友達と記録型のドキュメンテーションを友達と見ながら、オオゴマダラの成長過程を完成させようと卵を探し、見つけると「見つけた！オオゴマダラの卵！」一緒に喜び合う姿も見られた。その後は、リトミック遊びの中でも「ゆっくり飛んでいるオオゴマダラだよ」「高いジャンプもするよ！」とオオゴマダラやカエルになりきって表現を楽しんだり、図鑑を見ながら触角や模様などの細かい部分も気付いて絵に描いたりするようになっていった。

【考察】

ドキュメンテーション（新聞型・記録型）を活用することで、子どもたち同士で体験を振り返ったり、共有したりすることができ、言葉の伝え合いが増えたのではないかと。ドキュメンテーションで可視化したことで、子どもたち同士で目的を共有する遊びにもつながったのではないかと。また、生き物の変態を間近で見ることで、心揺さぶられる体験となり、伝えたい思いが育ったと思われる。生き物との触れ合いを通して、親しみや愛着を持つことで、面白さや不思議さに気付き、動きを真似て友達と表現を楽しんだり、細部まで意識して絵に描いたりする遊びにもつながったのではないだろうか。

2 実践事例「みんなで海の世界で乾杯しよう！」（6～7月）

【幼児の実態】

海の生き物が好きなD男が毎日繰り返し海の絵を描いている。夢中になって遊んでいるが、他児との関わりは見られず、クラスの子どもたちも個々で遊んでいる姿も見られる。

【教師の願い①】

- ・自分のイメージを伸び伸びと表現したり、言葉にしたりして楽しんでほしい
- ・他児が友達（D男）の良さや遊びに気付いてほしい

【環境構成】

- ・自分のイメージを形にする楽しさが味わえるような教材の準備（様々な海の図鑑、鉛筆、十分な用紙等）
- ・友達と継続的に関わって楽しめるコーナー作り
- ・D男の手作り図鑑（ファイル）の設置

【教師の援助】

- ・自分の考えやイメージを言葉にしたり、形にしたりする姿を大切に受け止め、表現する楽しさや面白さが味わえるようにする

【幼児の姿・変容】

D男が海の生き物を描いている様子を見たり、手作り図鑑を手にとったりして「本物みたいだね」と保育教諭に伝える姿も出てきた。D男の遊びに刺激を受け、K男が図鑑を見ながら海の生き物を紙に描き始める。しかし、自分のイメージ通りに描けず、困っている様子が見られる。D男は、描いたタコの絵をはさみで切り抜き、テーブルの下で気の合う友達と二人でごっこ遊びを楽しんでいる。隣では、廃材遊びが盛り上がっているが、それぞれの遊びになって子どもたち同士の関わりは見られない。

【教師の願い②】

- ・一人一人が自分なりのイメージを言葉で表したり、形にしたりして表現することを楽しんでほしい
- ・友達同士で関わって遊び、友達と思いを伝えながら遊ぶ面白さや楽しさを味わってほしい。

【環境の再構成】

(1) 伸び伸び表現できる環境の工夫

- ・子ども達一人一人がイメージを広げたり、具体化したりできるように海に関連する絵本や図鑑などを準備する
- ・イメージを実現できるように必要な材料や素材を準備する（トレーシングペーパー、画用紙、スズランテープ、マジック、廃材など）
- ・継続的に遊んだり、友達の遊びに気付いたりできるスペースやコーナーを確保する

(2) 子ども達がつながる環境作り

- ・友達同士で表現を楽しめるように十分な空間（海の世界）を確保する
- ・友達とゆったり過ごしたり、関わったりできるようにコーナー作りをしていく



D男の手作り図鑑



海の世界作り

【教師の援助】

- ・子ども達のイメージに寄り添って共感したり、その世界観と一緒に楽しんだりして、自分の思いや考えが伝わる喜びが味わえるようにする。

【幼児の変容】

自分でイメージした海の生き物をいろいろな素材や廃材を使って作り、子どもたちがそれぞれの表現を楽しんで創り上げる海の世界となっていった。海の世界に自分の作ったものを貼りながら「ここからチンアナゴが見ているよ」「魚たちが鬼ごっこしている!」と互いの思いやイメージを伝えたり、「どうやって作ったの?」「こうやったらいいんだね」と友達の考えを取り入れたりして遊ぶ姿も見られるようになった。また、海の世界の空間を気に入って2~3名でごっこ遊びを楽しんだり、「みんなで海の世界で乾杯しよう!」と友達を誘って海の世界を満喫して過ごしたり、子どもたちの憩いの場にもなっていった。

【考察】

色々な素材を準備することで、その物の特性に気付き、透け感や形などの特性を活かした制作遊びにつながった。また、子ども達の主体的な遊びを大切にしながら、友達とつながりが持てる環境やコーナー作りをしていくことで、子ども達同士がつながり、それぞれの表現やイメージの世界を楽しむことができたのではないかと。

一人一人の表現を受け止め、その世界感を共に楽しんだり、共感したりすることで、それぞれの海の世界のイメージが広がり海の世界の空間に愛着を持ったり、憩いの場として集ったりする空間になったのではないだろうか。



海の世界で集う子どもたち

IV 実践の振り返り

《成果》

- ・みんなで過ごす時間を大切にし、言葉遊びやお話タイムを作ったり、友達を意識できる環境づくり(サークルタイムなど)を行ったりすることで“伝わる言葉”“つながる言葉”など、言葉への感覚を高めることができた。
- ・記録を工夫し職員間で連携したり、保育カンファレンスを通して幼児理解を深めたりすることで、保育の方向性や環境構成、援助の方法を検討していくことができた。
- ・ドキュメンテーションを活用していくことで、子どもたち同士の会話や遊びのきっかけや、保育教諭や友達と言葉を育む有効的な手立てとなった。
- ・言葉に焦点を当てながらも、表現の視点も大切にしていくことで、言葉で表現する楽しさや喜びにも味わうことにもつながった。
- ・子どもたちの主体的な遊びを大切にする中で、心が動かされる体験を重ね、保育教諭や友達と関わり、自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりすることで言葉によるやりとりが充実してきた。
- ・環境を取り入れて遊ぶ視点を大切にいくことで、物を介して子ども達同士がつながり、自分の思いを伝え合いながら遊ぶ姿が育っていった。

《課題》

- ・ドキュメンテーションの作成には、体験したことから時間が経って掲示することもあり、計画性を持って掲示したり、継続的に取り組めたりできる工夫が必要だった。
- ・遊びに必要な環境や素材、教材、道具などの導入や環境を再構成するタイミングが難しかった。



カバマダラの幼虫を守る
ため子ども達が作った看板



放蝶する子どもたち

V 今後の実践に向けて

これからも、子どもたちの言葉に焦点を当て、必要な経験や環境構成、援助を模索し、次の段階の言葉の伝え合いを楽しめる保育の展開も目指していきたいと思う。また、豊かな言葉・伝え合う喜びを味わい、子どもたちの言葉の感覚を捉え、言葉の面白さにも気付けるように今後も取り組んでいきたい。そのためには、幼児理解に努め、心を動かされる体験を大切にしていきたい。そこで子どもたちの心が揺れ動く感動体験や感情体験にも寄り添いながら、言葉の育ちを支える援助をしていきたい。

〈主な参考文献〉

- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・大豆生田啓友 おおえだけいこ『日本版 ドキュメンテーションのすすめ』 小学館

園児の興味や関心を捉え、遊び込むための援助や環境構成の工夫 —振り返り、環境の再構成を通して—

糸満市立糸満南こども園 保育教諭 友利 亜紀

I テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領総則には、「保育教諭等は、園児の主体的な活動が確保されるよう園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、保育教諭等は、園児と人やものとの関わりが重要であることをふまえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、園児一人一人の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」と示されている。主体的な活動、遊び込むための環境を構成することは、園児を理解することが大切であり、園児の興味や関心は次々と変化したり、深まったり、発展したりしていくことを踏まえ、活動の流れや心の動きに即して、常に適切なものとなるように、環境を再構成していかなければならないと考える。

本学級は、4歳児（3年保育）計19名が在籍している。園児の実態としては、好きな遊びを見つけて伸び伸び過ごし、様々なことに興味を持って自ら関わる姿が見られる。一方で、日々楽しく過ごしているが、なかなか遊びが継続せず、次々と遊びが移っていく姿も見られる。これまでの自分自身の保育を振り返ると、園児理解に基づいた保育計画が不十分であり、日々の保育の振り返りや環境の再構成等が課題であると感じている。

そこで、幼児理解を深めながら、園児の興味や関心を捉えた環境構成、そして振り返りと環境の再構成を行うことで、一人一人が充実感や満足感を味わえるような環境づくりを目指していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 園児理解に基づいた環境構成と援助の工夫。（ドキュメンテーション作成）
- ② 保育実践を行い、振り返りをする。（外部講師を招聘した公開保育）
- ③ 保育カンファレンスを行い、環境の再構成をしていく。

III 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1 キャンプ遊び ～経験したことを室内外で楽しむ～

〈幼児の姿〉

・5月の連休明け「キャンプしたよ!」「バーベキューしたよ」等、嬉しそうに話をする姿が見られる。室内で、段ボールの仕切りやカバーを使ってテント遊びをしており、その中でマットを敷いて眠ったりしている。その後、戸外遊びの際にキャンプの話題になり、「キャンプは外でするんだよ」等の声があり、簡易テントを出すと喜んで園庭で中に入って遊んでいる。

〈保育教諭の願い〉

・イメージを実現したり、身近な自然物を使って遊びを進める楽しさを味わってほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉

当初（テントのみ）

環境の再構成（必要な道具を増やしたり、場所を変えたりした）



環境構成と援助の工夫

- ・室内で遊んでいた道具を戸外に持ち出せるようにし、室内外で遊びが楽しめるようにした。
- ・身近な自然物に興味を持てるように、石や枝、葉っぱなどを子ども達と集めながら「茶色いからお肉に見えるね」「燃やすときには枝が必要？」等声を掛け、イメージが広がるようにしたり、「あちち」と言いながらなりきって肉や魚（葉っぱ）を焼く真似をする子ども達のつぶやきを拾い、イメージを共有し遊びを一緒に楽しんでいった。
- ・5歳児クラスと一緒に大きなテントを砂場や手洗い場の側に設置し、遊びが盛り上がるようにした。

〈変容〉

- ・5歳児も一緒に遊ぶことで、遊び方や道具の使い方を知り、さらにイメージを膨らませながら遊びを楽しむようになる。
- ・別の遊びをしながらも、キャンプごっこ遊びに興味を持っている子もいて、戸外では参加しないが、室内でバーベキュー遊びを楽しむ子もいる。

〈考察〉

- ・子ども達が経験したことを遊びに取り入れられるように、子どもの声が上がった時点でテントを出し、キャンプの雰囲気づくりをしたことで、遊びが盛り上がったのではないかと。また、網やトング、紙皿等を準備したことで、さらにイメージが広がり、他の友達も興味を持って遊ぶ姿が見られるようになったのではないかと。
- ・5歳児クラスの友だちも一緒に遊ぶことで、遊び方、道具の使い方等を知り、さらにキャンプごっこ遊びを楽しめたのではないかと。

実践事例 魚釣り遊び ～友達との関わりを広げて～

〈幼児の姿〉

- ・6月、雨上がりに砂場に水が溜まっているのを見て、「もっと大きく掘ろう！」と言って大きく穴を掘って楽しんでいた子ども達。その中で、「海みたい！」という言葉がきっかけで海づくりが始まった。
- ・初めは大きく掘って水をためて楽しんだり、シャベルや皿を魚に見立てて楽しんでいた。一人の子の「魚を作りたい！」との声から、廃材としてあった牛乳パックを用意し、一緒に魚を作った。作った魚をシャベルですくって捕まえていたが、子ども達から「ぼうととるんだよ」との声があったので、その後、釣竿と一緒に作り魚釣りを楽しむ。室内でも魚釣り遊びが盛り上がり、ままごとにも取り入れていた。

〈保育教諭の願い〉

- ・友達同士でのやり取りが増えていたり、自然に役割分担して遊ぶ姿が見られる。友達と一緒に遊ぶことの楽しさを感じながら遊んでほしい。
- ・自分の思いを伝えると共に、相手の思いを受け入れながら遊びを進めてほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉

戸外



室内遊び (お魚やさん)



- ・作ったものですぐに遊べるように砂場の近くに製作コーナーを作った。
- ・一気に材料を準備するのではなく、子どもたちの声から徐々に材料をそろえていった。
- ・室内でも引き続き遊びを楽しんでいたため、室内でも魚釣り遊びとままごとが遊べる道具を用意した。
- ・イメージが広がるよう、エプロンや三角巾、バッグなどを用意した。

〈変容〉

- ・2、3名の友達同士、それぞれ遊ぶことが多かったが、普段あまり関わることの少ない友達同士でも言葉を交わしたり、一緒に遊ぶ姿が見られる。
- ・水を入れたタライを運ぶ際、「重いから手伝って！」「〇〇早くきて！」「◎◎あっちもって」等友達に声をかけて手伝ってもらったり、「みんなで持ったらかるい！」「今度は全員で持とう」等の声が上がっており、そのあとの生活でも積極的な友達との関わりが増えていった。
- ・子ども達の声から、日々、少しずつ遊びが変化していき、イメージを広げながら遊びを楽しむ姿が見られる。

〈考察〉

- ・子ども達のやりたい事と、保育教諭の道具や材料を出すタイミング等が合った為、イメージを広げながら長く継続して遊びが続いたのではないかと。
- ・作ったものですぐに遊べるように製作コーナーを砂場の近くに配置したことで、遊びが途切れることなく盛り上がったのではないかと。

実践事例3 マックやさんごっこ

〈幼児の姿〉

- ・10月、マックに行った子が廃材としてマクドナルドの容器を持ってきたことから、折り紙や画用紙でポテトを作ったり、ハンバーガづくりを楽しむようになる。その後、ドライブスルーのイメージとつながり段ボールで車を作ったり、ドライブスルーで注文する場所や駐車場を作ったり配達したりして楽しんでいた。

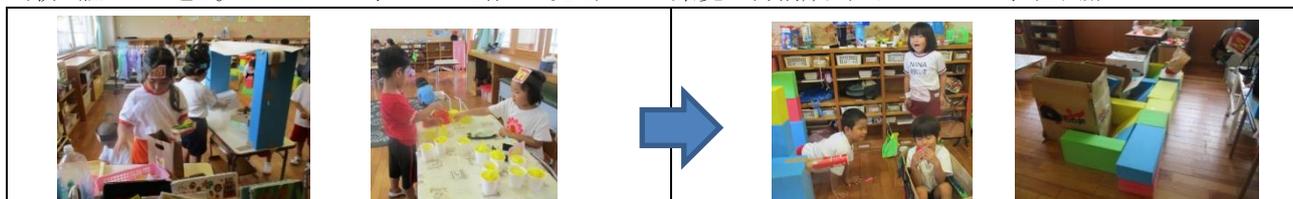
〈保育教諭の願い〉

- ・様々な廃材や材料を使って遊んだり、友達とイメージを共有したり、イメージを広げたりしながら一緒に遊ぶことを楽しんでほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉

当初（個々での遊び。ハンバーガー、ポテトを作って売る）

環境の再構成（ドライブスルー、駐車場）



環境構成と援助の工夫

- ・マックごっこを楽しんでいる子や段ボールで車を作って楽しんでいる子それぞれの遊びを友達と共有できるような声掛けをしたり、お互いの遊びが目につきやすいような場所に配置したりすることで、お互いの遊びに興味を持ったり、イメージの共有ができるようにした。また、それぞれのやりたいことを引き出せるような声掛けをしたり、どうしたらいいのか考えられるような言葉かけを意識していった。また、保護者へ情報を発信し、家庭でも子ども達の姿を共有していった。

〈変容〉

- ・自分の作りたいものを作り上げることが難しく、遊びが止まる子が多かったが、一緒に材料を探したり、イメージしたものを一緒に作っていく経験を多く持つことで、作りたいものが上手く作れなくても諦めずに取り組む姿が多くみられるようになった。

〈考察〉

- ・それぞれの遊びをつなげられるように、話をする場を設けたり、保護者に園での取り組みを発信していくことで、子ども達もイメージが広がったり、「もっと作りたい!」「あんなふうにつくりたい!」等の気持ちが高まったのではないかと。

IV 実践の振り返り

- ・研修での公開保育や職員での保育カンファレンスの振り返りによって、様々な視点での子ども達の気づきがあり、また自分の保育を見つめ直す機会となった。
- ・幼児理解に努め、その園児を温かく受け入れ、一緒に活動したり、援助したりしながら信頼関係を気づいたことで、園児が自己を発揮しながら活動できるようになった。
- ・友達との関わりが深まり、互いの良さを認め合える関係ができたことで、思いや考えを受け入れながら遊びが深まるようになってきた。
- ・日々の保育の振り返りや園内研修での話し合いを行うことで、全職員で環境構成や再構成を行うことができた。そのことにより、園児がもっと遊びたい、やってみたいと思える環境づくりができた。

V 今後の実践に向けて

- ・公開保育や保育カンファレンスの振り返りとして、遊びが進むスピードについて早すぎる部分があるということに気づくことが出来た。今回学んだことを活かして子ども達が何に興味を持っているのか、育ってほしい部分はどこか等、振り返りを行っていききたい。また、遊びを援助する際に、保育教諭の思いが出すぎているかと迷い、援助のタイミングを逃してしまうことがあったが、振り返りや環境の再構成を重ねることで、より適切な援助（関わりを高められる）ことにつながることを理解したので、今後も意識して取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

大豆生田啓友・おおえだけいこ 2020 『日本版 保育ドキュメンテーションのすすめ』 小学館